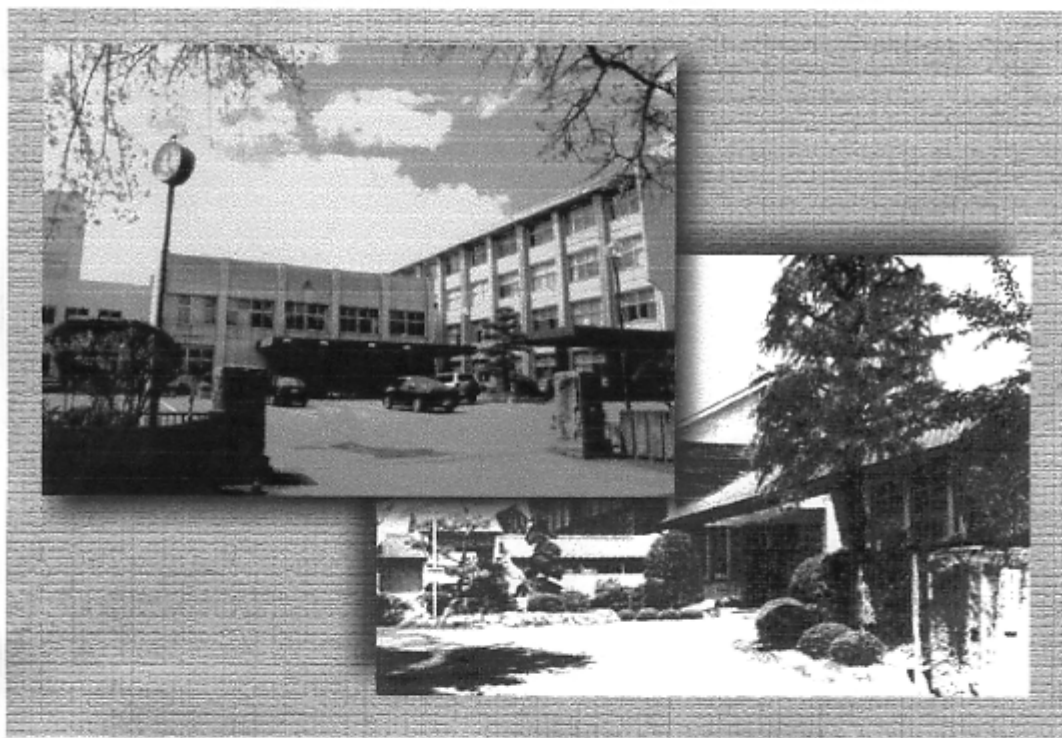


みのこのうの歴史

～同窓生に聞く～



2004年10月24日 箕工祭
長野県箕輪工業高等学校図書館・図書委員会

も く じ

もくじ

なぜ今「みこのうの歴史」なのか	2
箕輪工業高等学校の沿革	3
校名・学科・卒業生数等の変遷	6
年表からわかること <戦後>	10
卒業生数グラフ	12
普通科・男女人数の変化	13
聞き取り調査	14
中箕輪青年学校・召集	14
中箕輪青年学校・通年制	16
中箕輪高等女学校	19
長野県箕輪高等学校	21
同窓生に聞く「私の学生時代」	24
中箕輪実業補習学校	24
中箕輪高等学校	26
長野県箕輪高等学校	27
神子柴同窓会長	29
座談会の記録	30
「春雷をよぶ声」にみる箕工の15年	33
できごと一覧表	33
バイク四ない運動	34
石の上にも“基学”……年	35
自主活動の育成	
箕工祭公開基準	36
一冊10000円～自主ゼミ～	38
「箕工の教育」とは何だったのか	40
感想～みこのう調査を終えて～	42
渡邊 大槻 星野 八木 新井 井上	
追加資料 箕輪工業高等学校に学んで	50
参考資料 調査・まとめ協力者	54

なぜ今「みのこうの歴史」なのか

箕輪工業高等学校は昨年11月20日に創立80周年を祝いました。同時に発行された「同窓会名簿」にはみのこうの沿革史が載っています。それを一読しただけでも、本校が時代の波に翻弄されながら今日に至ったことがよく分かります。

そしてまた今「高校改革」という名の新たな時代の波が、みのこうに覆い被さろうとしています。「学校史」としてまとめた書物は本校にはありません。けれど「沿革史」を見ていると、制度や情勢の変化に伴って校名や教育課程を変化させながらも、この箕輪の地に高校を存在させ続けた「力」がきっとあるに違いないと感じ取れます。その力は何だったのか、それはまだみのこうに働いているのだろうか。卒業生を中心に学校を取り巻く人々の思いを聞き取ることによって見つけ出したいと思いました。

「みのこうの歴史」と銘打ってみたものの、半年間の図書委員会の活動で明らかにできたことはほんのわずかです。その中から、多くの先人たちのみのこうに対する願いと努力をくみ取り、「明るい未来を開く」ための力を得ることができれば幸いです。



長野県箕輪工業高校の沿革

印 今回「卒業生台帳」を確認して訂正した箇所
内 関連する国・県・郡レベルの教育法令・施策
印 同窓会名簿「沿革」についている解説

M30.6 郡長会議で知事演説 学齡外女子教育施設設置を奨励
M31.3 知事告諭 女子教育奨励 裁縫専修科の小学校付設要望

裁縫専修科(季節)

明治 30 年.4.1 女子 2 年制専修科開設 (冬期授業)

M34.10 上伊那郡 「小学校令」「私立学校令」の規定により裁縫等の補習教育機関を法制上の実業補習学校へ「引き直す」よう通牒

女子実業補習学校 (季節)

明治 35 年 3.1 女子実業補習学校と改称する。

M26.11 小学校令に基づく「実業補習学校規程」 県下に設立なし
M32.2 勅令「実業学校令」 実業学校の一つに位置付けられる
ただし、認可の主体は文部省ではなく地方長官

中箕輪農工補習学校 (季節)

明治 41 年 4.1 男女共学の農工補習学校発足する。

男女青年教育の重要性が叫ばれ、男子は2年で1月から3月までの3ヶ月間、毎週30時間の授業。授業料は、月40銭。女子は本科3年・温習科2年で、4月と12月から3月までの5ヶ月間、週34時間の授業で、月25銭。

中箕輪実業補習学校 (季節)

大正 9 年 4.1 中箕輪実業補習学校開設

当時昼間授業として郡下唯一のもの。

T8.1 訓令「実業補習学校施設要項修正要旨」 施設は義務教育に準ずる。学年制・科目制・混合制かつ通年制をとり、実習重視。

(通年制) 大正 13 年 4.1 通年制女子部 1 学級設置 建学の基点

大正 14 年 4.1 通年制実業補習学校発足する。男女各 1 学級。

郷土の中堅青年教育のため、通年制の学校が創立された「大正 13 年 4 月 1 日」が本校の基点である。

S5.10 県の極秘調査「経済界不況調査に関する件」 S6 の予算編成期を迎えた各町村の不況対策調査 (中等学校教員給与 1 割引き下げ・学級減・二部授業実施・3 学級 2 教員制・諸手当廃止等々)

昭和 8 年当時は郡下屈指の青年教育機関で、内容も当時の中等学校に近い高度のものを履習した。校舎は、現在の箕輪中部小学校の東北部にあたり、2 階建 16 教室。後、昭和 23 年、この校舎が新制高等学校として移築され、高校設置認可の最大の条件となった。

S10.4 勅令「青年学校令」 実業補習学校全てが青年学校に移行

新制中箕輪青年学校

昭和 10 年 9.1 実業補習学校を移行し、中箕輪青年学校となる。

男女別学、通年で 2 年。召集は男子 3 年・女子 1 年。通年を 1 部・召集を 2 部とした。(注；青年学校令によると通年制は男子部と女子部に分かれていた)
昭和 15 年 4 月 1 日より青年学校は義務教育となり、召集を 1 部・通年を 2 部と改称。

村立中箕輪青年学校

実業補習学校から青年学校まで、男子は普通教科・女子は家庭科を重点に置いた内容であった。

三ヶ村組合立中箕輪青年学校

昭和 19 年 4.1 中箕輪村・東箕輪村・箕輪村の 3 ヶ村学校組合の独立青年学校となる。

昭和 23 年 3.4 青年学校廃止

県下の殆どの青年学校は、分校として新制農業高校に組み込まれた

M43「高等女学校令」改定 家政に関する学科を主とした実科高女は M44 から S8 の間に多くの学校が新設され、拡充後高女に昇格した

中箕輪実科高等女学校

昭和 17 年 2.9 昭和 16 年 7 月文部大臣に申請し許可。

昭和 17 年 4.1 本科 2 年定員 100 名・補習科 1 年定員 40 名。

授業料 2 円 50 銭

昭和 18 年 3.17 校名変更と専攻科設置の申請。

長野県中箕輪高等女学校

昭和 18 年 4.1 長野県中箕輪高等女学校と校名変更、専攻科設置。

当時の教科内容は、公民科 21 時間・理数科 14 時間・家庭科 30 時間・体練科 11 時間・その他 11 時間を 2 年間で履習。昭和 19 年 9 月以降は、20 年 8 月の敗戦まで工場動員で全く多難な状態であった。

組合立長野県中箕輪高等学校

昭和 23 年 3.31 中箕輪、東箕輪、箕輪、南箕輪、西箕輪 5 ヶ村による、青年学校と高等女学校 2 校合併の学校組合立長野県中箕輪新制高等学校設置認可。

昭和 23 年 4.1 5 ヶ村学校組合立長野県中箕輪新制高等学校発足。

全日制普通課程は、男女共学定員 300 名で普通、家庭、農業の 3 選択コース。

定時制は普通課程男女共学 5 ヶ年、定員 150 名で昼間の午後授業。

校舎は高等女学校、青年学校の 2 階建て 16 教室 2 棟。

昭和 23 年 8.22 校舎を現在地に移築。2 階建普通 4 教室と南便所新築。

県立長野県中箕輪高等学校

昭和 24 年 4.1 教育委員会告示により県立移管。

昭和 25 年 4.1 農業課程認可。

昭和 28 年 4.1 農業課程の募集停止。

昭和 34 年 11.3 創立 35 周年記念式典。

昭和 35 年 3.7 定時制募集定員 80 名となる。

長野県箕輪高等学校

昭和 35 年 4.1 長野県箕輪高等学校に校名変更。

昭和 36 年 3.31 機械科棟第一期工事完成。

昭和 36 年 4.1 機械科 2 学級定員 80 名設置。普通科 1 学級となる。

昭和 38 年 4.1 電気科 1 学級定員 40 名設置。
定時制機械科 1 学級設置。

長野県箕輪工業高等学校

昭和 39 年 3.11 長野県箕輪工業高等学校に校名変更。

昭和 41 年 4.30 工業科転換完成式典。

昭和 47 年 4.1 定時制普通科募集停止。

昭和 48 年 4.1 普通科 2 学級となる。

昭和 48 年 6.17 創立 50 周年記念並びに体育館新築落成式典。

昭和 53 年 10 秋季国民体育大会フェンシング、少年団体優勝

平成 2 年 4.1 普通科 1 学級増設（普通 3、機械 2、電気 1）

平成 3 年 4.1 普通科 2 学級となる

平成 5 年 11.20 創立 70 周年、小体育館落成記念式典

平成 9 年 4.1 機械科 1 学級減（機械 1、電気 1、普通 2）

平成 15 年 4.1 機械科・電気科統合、総合工学科発足

平成 15 年 11.20 創立 80 周年記念式典

箕工の歴史（校名・学科・卒業生数等の変遷）

年		校名	科・クラスなど	卒業生数	
西暦	和暦				
1897	明治30	裁縫専修科開設(冬期授業)	(女子二年制)		
:	:	:			
1902	明治35	女子実習補習学校と改称(3月1日)			
:	:	:			
1908	明治41	中箕輪農工補習学校(季節)	(男子二年間…1月～3月までの3ヶ月間毎週30時間の授業 (女子…本科三年間・温習科二年間で12月～4月までの5ヶ月間、週34時間)		
:	:	:			
1920	大正9	中箕輪実業補習学校(季節) 開設			
:	:	:			
1924	大正13	中箕輪実業 補習学校(通年制)	通年制・女子部(1クラス)		
1925	14		通年制・男女(各1クラス)		10
1926	昭和1				37
1927	2				37
1928	3				34
1929	4				28
1930	5				48
1931	6				44
1932	7				40
1933	8				42
1934	9			40	
1935	10	9月1日より 中箕輪青年学校	通年…1部(二年間 男女) 召集…2部(男子三年間・女子一年間)		92
1936	11				86
1937	12				85
1938	13				93
1939	14	村立中箕輪青年学校	青年学校は義務教育となる…(召集…一部 通年…二部と改称)	107	修了生
1940	15			33	38
1941	16			46	38
1942	17	中箕輪実科高等女学校	「青年学校」と「実科高女」並立・「高女」は本科二年・補習科一年	117	20
1943	18	三ヶ村組合立 中箕輪 青年学校	長野県中箕輪 高等女学校	142	28
1944	19			102	24
1945	20			27	117
1946	21			28	64
1947	22			54	106

本校の基点

日米開戦

終戦

学校教育法公布

第一回卒業生

年次	学年	学校名	男子	女子	(農業)	(家庭)	定時制・普通課程(昼間部・夜間部)	合計				
1948	23	組合立 長野県中箕輪高等学校	男子9	女子8				27				
1949	24	県立移管 全日制普通課程(普通・家庭・農業の3選択コース)/定時制普通課程五ヶ年(昼間・午後授業)男女共学 県立 長野県中箕輪高等学校	33	21				54				
1950	25		29	27					56			
1951	26		29	7	男子21	女子0	男子0	女子34	男子6	女子0	97	
1952	27		32	6	13	0	0	35	15	0	101	
1953	28		26	20	13	0	0	32	17	5	113	
1954	29		30	18	24	0	0	39	22	12	145	
1955	30		24	19	26	0	0	38	22	22	151	
1956	31		20	23	25	0	0	44	14	6	132	
1957	32		25	21	32	0	0	48	21	2	149	
1958	33		22	31	34	0	0	52	9	7	155	
1959	34	23	24	40	0	0	46	18	10	161		
1960	35	71	72					11	18	172		
1961	36	56	85	機械科二学級新設				25	19	185		
1962	37	69	69					21	24	183		
1963	38	0	51	76	女子0			37	36	201		
1964	39	0	54	79	0			21	33	187		
1965	40	0	54	81	0	38	1	36	34	244		
1966	41	0	52	80	0	39	1	0	42	男子33	女子0	247
1967	42	0	52	81	0	40	3	27	44	38	0	285
1968	43	0	45	85	0	35	5	11	30	33	0	244
1969	44	0	44	76	0	39	0	22	14	22	0	201
1970	45	0	43	71	0	34	3	22	13	23	0	195
1971	46	0	41	74	0	35	0	23	15	15	0	188
1972	47	0	40	76	0	38	0	15	14	25	0	183
1973	48	0	42	81	0	35	5	25	11	17	0	199
1974	49	0	44	71	0	37	0	17	13	17	0	182
1975	50	0	60	74	0	38	0			15	2	189
1976	51	32	59	63	14	30	8			12	0	218
1977	52	36	60	62	16	28	9			10	0	221
1978	53	22	63	62	16	28	7			5	0	203
1979	54	21	64	64	6	29	4			5	0	193
1980	55	18	69	62	12	32	6			6	0	205
1981	56	20	64	65	6	36	4			9	2	210
1982	57	15	75	62	10	31	4			7	1	213
1983	58	23	69	69	5	37	0			7	0	203

創立三五周年 / 県立移管一〇周年

県立移管

全日制普通課程(普通・家庭・農業の3選択コース)/定時制普通課程五ヶ年(昼間・午後授業)男女共学

募集停止

昼間部廃止

24年3月の卒業生は「高女第7回卒」が31名、「中箕輪高校・第1回卒」が27名。

定時制機械科一学級新設

校名変更
箕輪工業高等学校
S39年3月11日

普通科一学級に

機械科二学級新設

電気科一学級新設

普通科二学級に

1984	59	長野県箕輪工業高等学校	22	67	67	6	38	0				3	0	199
1985	60		18	70	68	3	37	1				3	0	213
1986	61		24	64	79	1	38	1				6	0	215
1987	62		25	67	79	1	40	0				3	0	207
1988	63		18	70	77	0	36	1				3	2	210
1989	平成 1		13	74	76	2	37	2				6	1	206
1990	2		13	76	72	3	39	0				3	0	198
1991	3		25	60	72	1	37	1				2	0	245
1992	4		41	89	76	0	35	0				3	0	191
1993	5		34	48	67	0	41	0				1	0	169
1994	6		32	44	62	0	30	0				1	0	177
1995	7		26	45	71	0	27	0				5	1	144
1996	8		34	24	57	0	25	0				4	0	100
1997	9		22	25	39	0	22	0				2	0	89
1998	10		27	19	28	0	11	0				4	0	113
1999	11		32	28	27	0	21	0				4	0	95
2000	12	27	21	24	1	19	0				3	0	110	
2001	13	29	22	32	0	17	0				9	0	110	
2002	14	38	21	34	0	27	0				3	0	123	
2003	15	35	19	30	1	24	1				3	1	114	
2004	16													

創立八〇周年

普通科三学級に

普通科二学級に

総合工学科一学級新設

機械科一学級に

機械科電気科募集停止

数字はすべて当該年度の卒業生数です。

年表からわかること <戦後>

【 全日制・男女生徒数について 】

* 昭和23年に「組合立長野県中箕輪高等学校」が発足して以来、クラスは男女混合で構成されていたが、昭和36年に機械科が2学級新設され、普通科が1学級となった。その時点から機械科の生徒は男子ばかり、逆に、普通科は女子ばかりとなる。2年遅れて昭和38年に電気科が1学級新設されるが、電気科も、ほぼ男子ばかりである。この工業科に女子がわずしかか入らないという傾向はその後もずっと変わらない。

ただし、昭和52年前後から7年程は、機械科に15人、16人・電気科にも8人、9人・の女子の卒業生が出ており、この時期には違った傾向が見られる。

* 普通科は昭和49年に2学級に増えるが、その時点から普通科に男子が入るようになる。それでも、平成3年卒業生あたりまでは、男子は女子の3分の1と少ないが、普通科が1年だけ3学級になった翌年から、男子と女子の差が少なくなり、平成8年卒業生では、男子の方が女子を上まわる。その後は(平成9年はわずかに女子が多いが)、男子の方が多くなり、学校全体としても、女子より男子の方が、かなり多い印象を受ける学校となってくる。

【 工業科について 】

* 機械科は昭和36年に2学級でスタートをしたが、そのころ校名は「箕輪高等学校」であった。

昭和39年3月11日に、「箕輪工業高等学校」に校名変更が認可されるのを待って、機械科第1期生の卒業式は行われた。機械科1期生は、「箕輪工業高校」の第1回卒業生となる。

* 機械科はスタート以来、ずっと2学級であったが、平成9年に1学級に、そして平成15年には、機械科と電気科が統合され、「総合工学科」となる。よって、機械科は41年間、電気科は39年間で幕を閉じたことになる。

【 定時制について 】

* 組合立長野県中箕輪高等学校が発足された当初から、本校には昼間部・夜間部方がある普通課程の定時制が設置されていた。昭和30年頃には昼間部は廃止されたようだが、昭和38年には、機械科が1学級新設された。

機械科が設置されると同時に、普通科は女子ばかり、機械科は男子ばかりという傾向となったのは、全日制と同様である。

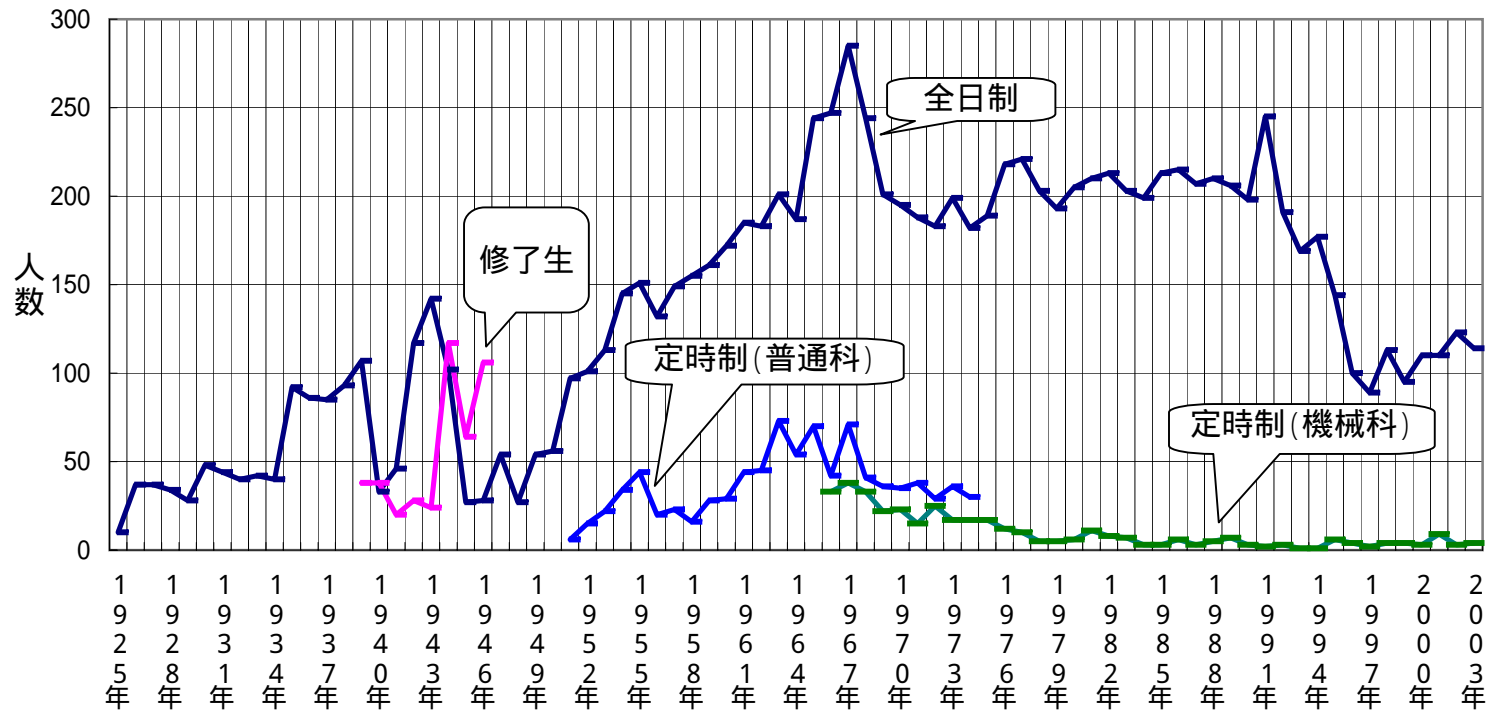
* 定時制の卒業生だけで100人を超える年もあったが(昭和42年)、その翌年から急激に減り始め、5年後には、普通科の募集が廃止、昭和50年の卒業生は12人と落ち込み、その後の卒業生も10人足らずといった傾向で、最近では極めて少ない数となっている。

【 卒業生数について 】

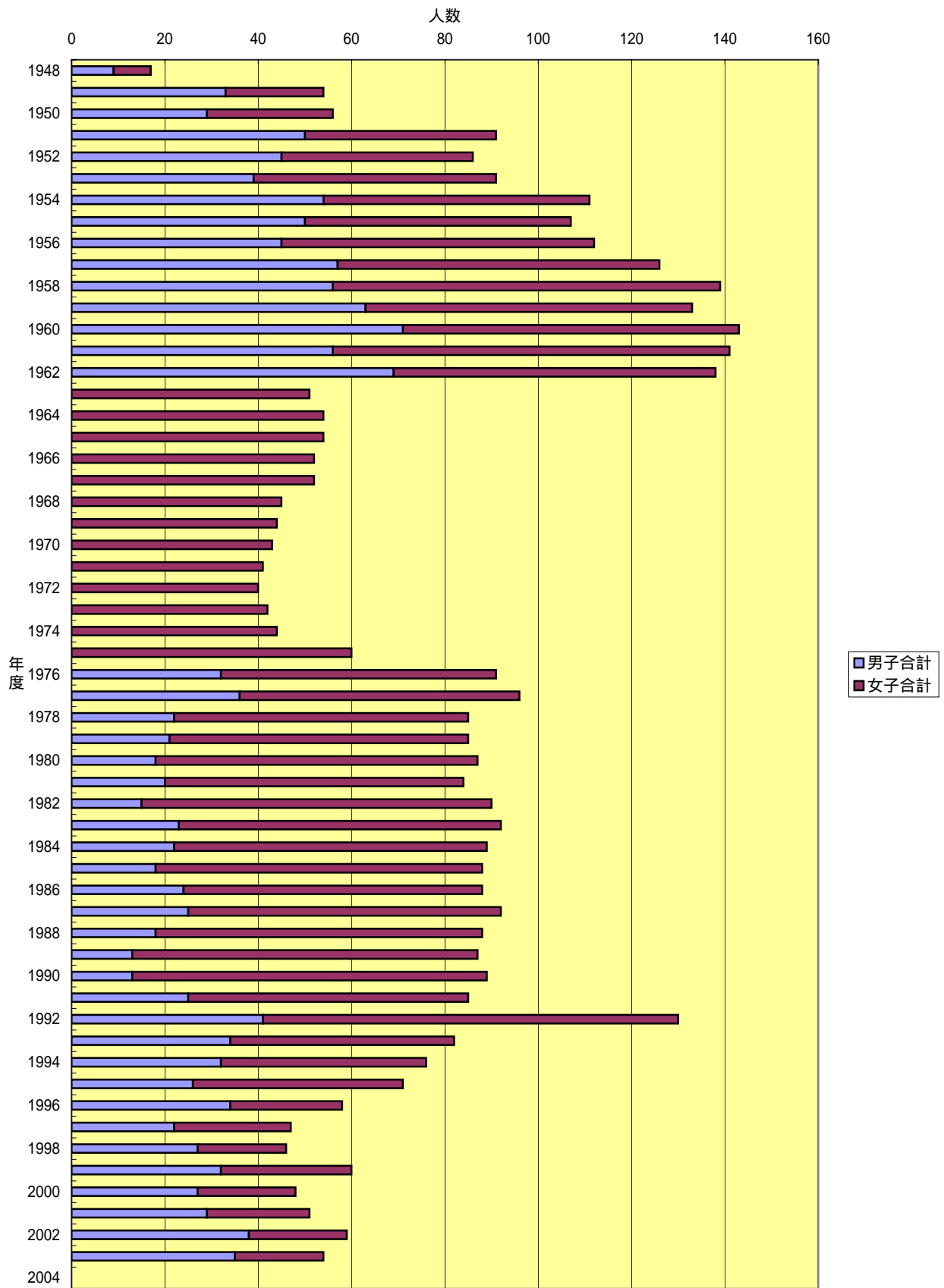
* 卒業生が最も多いのは昭和42年度の282名であり、最も少ないのは平成9年度の89名である。昭和42年度は、全日制が機械科2クラス、電気科、普通科各1クラス、定時制に普通科2クラス、機械科1クラスあった頃であり、特に定時制の普通科の人数が多いことから最多卒業生数となっているようである。

* 平成2年は全日制普通科が3学級となる。その翌年はまた2学級にもどる。そのころの卒業生数は多いものの、その後急激に卒業生数が減る。このことは、本校が上伊那の中学生に不人気であったことを表していると思われる。

卒業生数



普通科男女人数の変遷



みのこう聞き取り調査

平沢芳美さん

平沢さん宅

1 プロフィール

大正9年11月15日生まれ

S10年3月 高等小学校卒業

S10年10月 入学 新制中箕輪青年学校 本科 部(召集)

S15年3月 卒業 新制中箕輪青年学校 本科 部(召集)

召集 学校から来いと言われて行く 週2~3回 半日ずつ 軍隊教育が主
授業;国語読本 後期のみ 春の鳥 山椒太夫が残っている
軍隊教育;行進 銃の撃ち方 手入れ 行軍 戦闘訓練 他

S15年5月 徴兵検査(甲種合格)

S15年12月 半ば頃召集 宇都宮へ入隊 一週間実弾射撃訓練

12月22日~23日頃 芝浦港から出港 30日 上海に上陸

2 青年学校のこと

通年制と召集の違い

青年学校通年制 = 2年間毎日通学 卒業 青年学校 召集へ
例;農家の長男 学校卒業後農業 青年学校 召集 徴兵検査 軍隊へ
次・三男 卒業後都会へ奉公 青年学校 召集 徴兵検査 軍隊へ

青年学校召集;場所 中部小学校の一部を利用

同学年は56人 男女別の教室

女も召集された 週2.3回 ほとんど農家の娘や「手伝い」

裁縫や銃後の訓練

通学服 男性 軍服 詰襟でモスグリーン 略帽(徽章)

女性 モンペ(高等科の時は袴)と半着

配属将校はいない 軍隊教育は除隊したばかりの人(22~24歳くらい)

顔見知りの近所の人だったが厳しかった

行事 唱歌 よく歌を歌った 青年学校の歌

青年訓練所の歌

卒業式で歌の先導をするように言われ、一小節目で青年訓練所の歌を歌ってしまった。宮坂校長は妙な顔をしたが皆ついて歌ってくれた。一クラスだけの卒業式で女の子はいなかった。

(忘れられない思い出)

なぜ青年学校に入ったか

伊那中や農学校へは行けなかった。高小を卒業してから農業をしていたが、青年学校は義務教育だったので農業しながら仕方なく行った

兵隊に行っても困らないように、出世できるように勉強した

思い出

楽しかったことも特別うれしかったことも無かったが、体格はいいし人よりできたので苦労も無かった

農家の長男なので農作業の息抜きにはなった

先生からは信用されて、大切にされていた

3 今と昔を比べて

・昔の子どものほうが働いた。親から頼りにされていた。むすびを置いて畑に行っていたので、学校から帰ったら働きに行かざるを得なかった

・上に兄弟がたくさんいれば遊べる子もいたが、自分は遊べなかった

・小学校の暖房は朝だけ火鉢があった。青年学校は午後からだったので暖房無し

・通常は午後半日だったが、時々弁当を持っていった。農家なので米はあった。

アルミ弁当(厚さ 2~3 センチ A5 版くらいの大きさ) 飯 梅干 漬物
時に塩鮭の切り身

青年学校

1935年(S10)に実業補習学校と青年訓練所を統合して発足した学校。普通科2年、本科(男子5年・女子3年)などから構成され、中等学校と並立した。勤労に従事する子ども・青年を対象とし、小学校の施設・設備や教員に依存したものが多い。男子の場合は教練の比重が大きく、本科修了者には兵役の在営年限短縮の得点が与えられた。1939年度から男子のみ義務教育となって、この特典が撤廃された。義務化後には私立の青年学校が多数設立された。1947年廃止。(角川日本史辞典より)

(設立の目的・教育内容)「心身を鍛練し徳性を涵養すると共に職業・實際生活に必要な知識技能を授けて、国民としての資質向上を図る。」となっているが、近代科学戦争を遂行するために兵の水準を上げる必要があった。対象年齢の約半数をしめる未就学者に対し、修身・公民科20時・普通学科50時・職業科70時・教練70時の計年間210時の教授および訓練をおこなった。

年一回、他校と紅白戦(模擬戦闘)

S18 S19 勤労働員はまだ無かった

1クラス30人 召集の女子は裁縫の人たち

召集の青年学校では軍隊教育を散々やってあったので、入隊しても要領がわかって割といい目を見た。都会で勤め人になっていた者たちは困ったと思う。

(注;召集の青年学校は S15 年4月から義務制となり、中学校の卒業者と在学者をのぞく全ての青年が徴兵検査まで通った)

3 忘れられないこと

千葉の海岸で終戦直前に墜落したアメリカ軍の飛行士を日本兵が刺してしまった。私はその米兵を千葉の佐原にある病院へ護衛して行った。病院は佐原の女学校にあった。その米兵は軍隊のトラックの荷台から足が余っていた。それくらい大きかった。戦後になって米軍の調査のために千葉に呼び出された。その時の指揮官や上官も一緒だった。不安は大きかったが、結局私にはお咎めは無しだった。

4 終戦直後の学校

戦後になって新しい高校を作るために中部小学校から現在のところへ校舎を移転した。現在高校がある場所は町の人たちがお花見をするような公園だった。新しい学校(現所在地)へ生徒が机やイスを運んだ。高校ができて一番喜んだのは、戦後初の箕輪町町長になった碓田町長だったと思う。碓田さんは青年学校の卒業生で木下の出身。

5 同窓会のこと

同窓会長には、木下出身の人が数多く就任してきた。

昭和46年から49年にPTA役員をした後、同窓会役員になった。その頃は組合活動が盛んで、学校に日の丸を立てることに反対する職員がいたので、同窓会の役員が立てた。降ろされないようにその下で見張り番をしていた。

(質問;それで何か学校にとって良かったことがありましたか)
抵抗する先生たちが転勤して、学校からいなくなったこと。

6 親として

PTA

昭和46年から49年まで子どもたちが箕輪工業高等学校に入ったのでPTAの役員を

した。生徒はその頃には少し変になりかけていたが、まあ落ち着いていた。木下駅でたばこを吸って困った。

昼休みには帯無川の川端で女の子までたばこを吸うので、先生たちは見回りをしていた。

表だったけんかは無かった。

当時は制服制帽だった。

7 現在の箕輪高校の生徒について(寄稿)

その後、先生方のご努力のおかげで現在の箕高の生徒は大変に真面目で素直な良い生徒に変わって来たように見受けられ、嬉しく思っております。

先日も稲刈りしておりますと、マラソンの生徒が真剣に走って行きますので、「頑張れ」「頑張ってね」と妻と二人で一人ひとりに声をかけて応援してやりました。ゴールも近く疲れているのに、にこっと笑って「ありがとうございます」と元気よく走って行き、清々しいものを感じました。

8 今後の箕輪高校について

青年学校が中箕輪高校に変わった時には、箕輪町にも高校ができた大変に嬉しく思いました。近頃その存続について問題になっているようですが、発展していく箕輪町のためにも、私たち卒業生の心の拠り所のためにも是非とも残して、続けて頂きたいものと深く願望致しております。



1 プロフィール

S19年3月卒業

入学時 中箕輪実科女学校

卒業時 中箕輪高等女学校

2 学校のこと

進学したのは、友だちも行ったのでなんとなく入った(生家は上古田)

勉強に専念できたのは1年次のみ

国語 数学 体育

論語素読(担当 富田の向山先生)

裁縫(担当 長岡長松寺のお大黒 材料は自前で用意)

2年次は勤労奉仕に明け暮れた

出征兵士の家へ手伝いに行った

田んぼ他、農家の手伝い(明音寺に2,3泊 教師共)

この時1年生は竜水社へ糸取りに行った

制服は無かった

普段着 自作の服(ブラウス)と雪ばかま(モンペ)

式服 着物と袴…高等科の時はいつもこのスタイルだった

たび(足袋)は自分で帯芯を使って作った(祖母や母から習った)

この頃までの女性たちは、嫁入り支度の着物用の布も自分で織ったという

昼食 農家の人は米の弁当を持てた

非農家の人は大根葉などを入れた混ぜご飯

弁当を持ってこなかった人はいなかった

おかず 漬物 梅干 前夜、自分のおかずから取り分けておいた物

学校で楽しかった思い出は無い。当時は国も人も日本中が、今報道されている北朝鮮のようだった。

専攻科は1年設置されただけで廃止された

記憶に残っている先生

向山正視 伊藤一郎 酒井美鈴 石川教明 以上物故

福原文江(横浜市在住)

長松寺(長岡)のお大黒

3 卒業後はどうしたのか

女子は挺身隊に組織されて、働きに出た

S19年3月卒業生 多くは辰野の「芝浦タービン」(現 石川島汎用機械)へ

Oさんは東京板橋の「凸版印刷」で切手を作った
東京で、空襲の記憶は無い

終戦時は生家に戻って百姓の手伝いをしていた

S20年3月卒業者 箕輪の「竜水時計」(現 旭松食品)

栄養失調になった人が多かったと聞いている

敗戦で挺身隊は解散になったが、電車が走っていなかったので、みんな荷物を背負って歩いて帰った

4 今思うこと

- 1) 私たちの世代には青春が無かった。その後も家庭に入って耐えてきた。今が青春だと思っている
- 2) 服装一つ見ても今の若者は裕福でわがままでと思う。その反面自分が苦勞したことは、自分の後にくる人たちにはやらせたくない思いもある。分相応ということも大事ではないか
- 3) 若い人の多くが、年寄りから見ると危なっかしい行動をとっている気がする
- 4) 世代間で言葉が通じない 例;早口で聞き取りにくい話しかた 理解しがたい略語(セカチュウなど) 感情的で自分たち中心の言葉

中等学校令(1943年)

1937年(S12)に発足した教育審議会は、国民学校高等科と義務制青年学校設置で青年大衆教育を系統化する一方、中等教育改革案を策定した。さらに中学校・高等女学校・実業学校を同格の学校として法律的に一本化をはかった。1943年(S18)に中等学校令を制定し、戦時軍事的経済的要請をいれてドイツと同様に中等学校の修業年限をそれぞれ1年ずつ短縮した。

教科 社会科 世界史 日本史

国語 現代国語 漢文・古典(教科書は1冊)

数学 数学 数学 数学 (進学コース) 代数 幾何

英語 英語 A 英語 B

体育

家庭科 1年次から3年次まであった

制服 指定店で注文して仕立てた

冬服 紺のセーラー服(襟に白線2本 ネクタイは黒)

紺のジャンパースカート(スカートの裾は地上30センチの規則あり)

2年次からネクタイ止めに「m」のロゴが白の縫い取りで入った

夏服 白半袖のセーラー服(襟は黒 白線2本)

ネクタイとジャンパースカートは冬服と同じ

男子生徒の制服は市販の学生服に校章入りボタン

昼食 弁当か途中の店で買ったパンを教室の外に出かけて食べた

用務員さんが作る味噌汁をご馳走になることもあった

用務員さんは家族で住み込んでいた。小森さんは独身で箕高生の弟と暮らしていた。その後飯島さん一家がきた。

3 学校生活

1) 勉強のこと

試験の結果が毎回、廊下に張り出された

総合計順位 上位10~20人が実名で、後は番号のみ

科目順位 //

全校漢字書き取りも同じように張り出された

名前が出ないと恥ずかしいので猛勉強した

2) 学校行事

・応援練習 恐かったが今思い出すと懐かしい

・文化祭「箕高祭」 楽しかった 特にフォークダンスとファイアストーム
ダンスナンバーはコロブチカ、マイムマイム、オクラホマミキサーなどパートナーチェンジがある曲ばかりだった

・体育祭 陸上競技 砲丸投げ ハードル バasketボールなど
エキサイトして危険な競技もあった。ハードルの選手になったが棄権したことがあった。

・インターハイ 卓球の松沢せつ子さんが県大会で優勝してうれしかった

・キャンプ 1年次 2年次

- ・修学旅行 3年の春 関西方面へ行った
 - 叔父さんと面会して生まれて初めてフルーツパフェを食べた
- ・テスト 中間と期末があって、成績はその都度廊下に張り出された

3) 先生のこと友だちのこと

- ・先生からはとても大切にされていたと思う。温かかった。
- 中込先生(数学)は停学になりそうな生徒を守ってくれた。
- 武居伊織先生(クラス担任)もゴタな子たちを集めて勉強を教えた
- ・思い出の先生
 - 加藤たつ江 下平繁(担任) 野口博志 日戸武彦 小口正人(故人)
- ・暴力はなく、平和だった
- ・校庭の石碑の周りがみんなの集まる場所だった。そこでの会話は楽しかった
- ・S36 年頃白い毛糸のマフラーが流行したことがあった。シマダヤに売っていたのをみんなで争うように買って首に巻いた。紺の制服に白いマフラーがひるがえる通学の光景はきれいだった
- ・生徒が学校に無断で登山したことがあった。男子3人だったが、先生が追いかけて登って行って連れ戻した。同級会があると必ずそのことが話題になる。

4 今の学校・高校生に思うこと

- ・80周年で学校に行ったとき、生徒玄関の靴が散乱していて廊下もホコリだらけだったのがショックだった
- ・今の高校生は自分の思ったとおりに生きているようでうらやましい
- ・箕輪の伝統を失ってほしくない。教育の場であってほしい
- ・自分の思い出、青春時代の学校は無くなってほしくない。

同窓生に聞く 「私の学生時代」

座談会

時 9月29日(水)

場所 箕輪工業高校 図書館

出席者 寺平 登さん(昭和8年卒業 中箕輪実業補習学校)

橋爪 了一さん(昭和30年卒業 長野県中箕輪高等学校)

唐澤 千洋さん(昭和37年卒業 長野県箕輪高等学校)

神子柴 和義さん(昭和30年卒業 長野県中箕輪高等学校 現同窓会長)

図書委員	委員長	八木栄里奈	3年	普通科
	副委員長	星野 里美	3年	電気科
	委員	渡邊 賢	1年	普通科
	委員	永由 貴大	1年	普通科

お家へうかがって話を聞くことができなかった何人かの内、4人の方が学校へお出でくださるといので、座談会を企画しました。あいにくの雨にもかかわらずテスト最終日の午後、まだ数人現役生がいる図書館に、寺平さん始め同窓生のみなさんが集まってくださいました。昭和20年中箕輪高等女学校卒業の中原智恵子さんもいらっしゃる事になっていましたが、町の文化祭準備が早まったため急に欠席ということになり、非常に残念がっていられました。

以下に一人ずつ順にプロフィールを収録し、その後へ座談会の模様を記録します。

A プロフィール

1) 寺平登さん 昭和6年4月入学 中箕輪実業補習学校 昭和8年3月卒業

・ 入学の動機(理由)、それに対する保護者やまわりの人たちの期待・願い

農家の長男で農業を継ぐ立場だったので、伊那中へ行きたかったが親が許さず、やむを得ず実業補習学校へ入学した。父親の要望は地元の学校を出て家を継ぐことにあった。

・ 当時の学校の雰囲気、学校と地域との関係

学校の気風が質実剛健で、教師にもそういう気風が濃かった。とにかく真面目にいっしょうけんめい勉強した。本科は通年制で修業年限2年、年間授業日数225日。田植え時期は1ヶ月休み、冬は休み無し。別科は冬期間41日間の授業だった。

当時は小学校の卒業生が 100 人いれば、そのうち 12.3 人が伊那中や農学校、女学校などの中等学校へ進学した。その人たちは卒業後、家業につかないのが普通だった。昭和 7 年に就任した牛沢博美校長は、このことを指して「実業補習学校は大衆教育の完成を目指し、郷土を担う者を育てる。」という方針を出した。卒業後は村に残り、中心的存在として役割を果たし、活躍することが期待されていた。卒業後はほとんど全員が村にいた。

小学校同級生 206 人(小 6 まで義務教育) 高等科(2 年制)120 人 実補(2 年制)22 人

中等学校進学 12~3 人 (伊那高女 部 農学校 部)
(伊那中 伊那高女 部農学校 部)

実業補習学校と農学校へ行った人が村に残っている。

村の主産業は農業。農学校へ行った人は農家の長男が多い。

・ 学校生活への満足度

父親の勧めで伊那中進学をあきらめ泣く泣く実業補習学校へ行ったが、町に残ることになって良かったと今では思っている。伊那中へ行けば家にはいなかった。外へ出て違った方向に向いていたと思う。

地域のことで今までのいろいろやってきた。(青年団 消防団 神社総代会 商工会等)

外へ出て自分のために何かを成しとげるのもいいと思うが、地域のためにいろいろやって郷土を支えることはいいことだと思う。

・ 現在の「みのこう」について

年齢的に余りにも離れているので、印象が無い。

・ 「みのこう」に対する要望 他

卒業したら町や村に残って、中核となって働いてもらいたい。

現在の箕輪町議の出身校別人数

みのこう 6 人、上農 5 人、伊那北 2 人、箕輪中学校 2 人、
弥生 1 人、辰野 1 人、飯山北 1 人

今後も箕輪の中核を担ってほしいと願っている。

2) 橋爪了一さん 昭和26年4月入学 長野県中箕輪高等学校

昭和30年3月卒業

・ 入学の動機(理由)、それに対する保護者やまわりの人たちの期待・願い
定時制課程へ昭和26年入学、昭和30年3月卒業。

昭和26年当時は仕事が少なかった。長男だったし働かないと食べられないので、昼間は勤めることにして夜間部に入った。

・ 当時の学校の雰囲気、学校と地域との関係

宮田キャンプ場から西駒ヶ岳へ登山したこと。その後登山というもののはしたことがなく、生涯一度の思い出になっている

夜間部にはどの学校でも大勢の人が通っていた。一クラス40人以上の学年もあった。

夜間部卒業人数	S28	12~15人	S32	20人
	S29	20人	S33	22人
	S30	35人	S34	16人
	S31	44人	S35	27人

昼間は働いて稼ぎたいが、夜は勉強したいという人が来ているのが夜間部定時制だった。

この当時みのこうには昼間部定時制もあった

・ 学校生活への満足度

夜間部は普通のことだと思っていた。

昼間(全日制)の生徒が体育館や校庭をクラブなどで使っていて、夜間の人たちはなかなか使うことができなかった。こういう時はやっぱり昼間へ行きたかったと思った。

・ 現在の「みのこう」について

学校へ来てみれば、校内では挨拶がよくできていると思う。

しかし学校の外では、集団でスケボーをしたり目的も無くたむろしていたり、自分勝手な生活をしているようで首をかしげたくなる人もいる。こういう行為は目立ってしまう。

= 校外での規律が乱れている。

学校の勉強と、当たり前なのが当たり前でできることが大事だと思う。

ところが3年の時、職員会が文化祭をやらないことを決定した

職員会がそう決めた理由

当時全国一斉に学力テストが行われた。その結果が全国2位だったので、先生たちはもっと勉強させてもっと良い成績をとるようにしたいと考えた。(と当時の生徒は思っていた)

弁論大会で論議 教師にバカヤロウと言って謹慎10日の生徒もいた

生徒総会でもんだ その生徒総会の議長を勤めた

採決したら5:5だったが、議長裁定で開催を決定した

もう残された日は少なかったが、みんなで夢中になって準備して盛会だった

当時のことは今でも集まれば夜を徹して話すほど強烈な記憶

学校全体から見ればごく一部に荒れている者もいた(細いズボン)。しかし大方は学校の気風を高めようと気概を持ってやっていた。

・現在の「みのこう」について

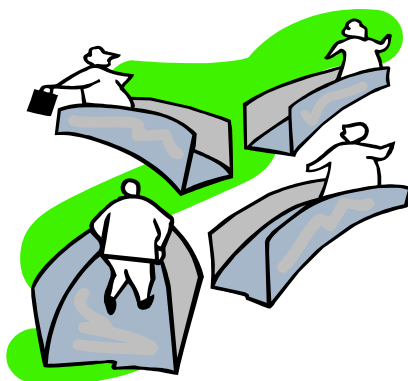
挨拶運動で久しぶりに学校へ来てみたが、今流の高校生らしくていいのではないが。

今後はみんなで校風気風を高めようという気持ちを持ってやってほしい。

私たちの時は勉強で競い合っていた。毎日の漢字クラスマッチでも、他のクラスに負けないうように助け合って競い合った。

・「みのこう」に対する要望他

地域にあって、地域に生きていく力を育ててほしい。



B 座談会の記録から

1) 開墾のこと

実業補習学校時代から行っていた開墾について話してもらいました。

開墾は昭和6年に寺平登さんが入学した時から始まっています。春日街道と大型農道の間にある「リズム時計」社屋の東側一帯が本校の開墾地でした。松やカヤを抜いて耕し、中部小にあった校舎の便所から下肥を運んで行って撒きました。肥桶に汲みいれて二人で担ぎました。開墾に行く日は半日働き続けます。作った物はそば、ひえ、大根、豆などでした。

農作業がきつかったせいか、体育の授業というのはやった覚えがありません。その代わり剣道の時間がありました。昭和6年当時から学校では軍事教練が行われていました。まだ戦時色は濃くなかったのですが、教練は激しかったようです。

寺平さんの同級生は22人が卒業しました。ほとんどの人が戦争に行き半数が戦死しました。88歳の現在、生存している人は3人だけです。

2) 箕輪 箕輪工業へ;生徒はどう受け止めていたのか

戦後の日本は工業立国を目指していた。1960年代の後半は伊那谷にも「興亜電工」「信英通信」など地元の電子産業が盛んになり始めていた。工場誘致条例ができて、下請けの小さな工場がたくさんできた。昭和35年頃、箕輪には「興亜」の下請けがたくさんあり、「松島工業」ができた。校名が「箕輪工業」になることに違和感はなかった。

昭和37年3月卒業の学年だけが、3年間全クラス普通科だった。工業科設置の経緯、機械科や電気科の施設教育内容などについて知らされていなかったし、わかりたいとも思わなかった。ただ、卒業時の「箕高新聞」によると、この年初めて国家公務員に4人合格したとでている。学年の雰囲気はその事実が表していると思う。

3) 夜間部という呼称

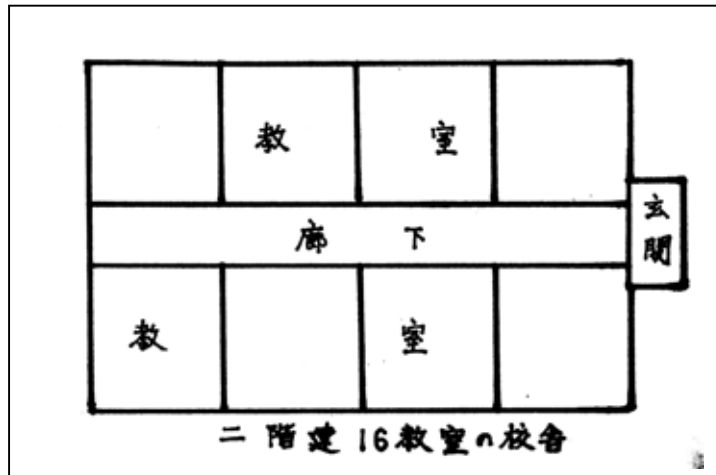
組合立中箕輪高等学校だったときから、定時制が二つあった。昼間の定時制と夜の定時制。昼間の定時制は農業科で、週に3日間くらい学校へきて勉強し、後は家で農業をしていた。農繁期には長いお休みがあって、4年間通学して卒業になった。夜の定時制は今の定時制と同じで、月曜から土曜まで毎日夕方登校した。通学期間は昼間の定時制と同じく4年間。昼間の定時制は昭和30年に廃止されたが、呼び方の習慣だけ残って夜の定時制を「夜間部」と呼んだ。

4) 昭和8年の新築校舎

このころ新築され、新制高校認可の決め手となったという校舎は、現在のみのこの地に移築されたのだろうか。

2階建て16教室という校舎はかなり長大な建物だと想像していたのですが、実は廊下を挟んで4つずつ教室が向かいあっていたのだといいます。中央の廊下の突き当たりに破風屋根の玄関があったそうです。

この校舎は中部小の敷地からは移されず、玄関だけが昭和28年9月に新築された校舎に移築され、その後長く玄関として使われていました。



5)文化祭

昭和30年代の文化祭 クラブの展示発表や舞台発表が中心でした。楽しみはフォークダンスで、流行歌にあわせて踊った記憶があります。舟木一夫の人气が高かった頃で、「学園広場」「高校三年生」などのナンバーがありました。陸上クラスマッチも文化祭中に行いました。

内容	展示	社会科クラブ	古田人形の歴史
		社会科クラブ	神子柴遺跡
		社会科クラブ	農村婦人の社会意識調査(指導 大槻正義氏)
		手芸クラブ	手芸品の展示
		美術クラブ	図画工作 油絵
		フォークダンス	
		陸上クラスマッチ	

3年の時は文化祭そのものを止めようとする職員会と、続けようとする生徒会が対立しました。生徒会は弁論大会や生徒総会を開いて続けることの意義を確認しました。

- もめた原因
- 2年の時やった全国学力テストで全国第2位だったから
 - ・ 勉強ヘシフトしようとする教職員
 - ・ 高校時代を楽しみたい生徒
 - ・ 学校全体は工業高校へ
- みんながそれぞれ学校の未来を模索していたようです。

6) フェンシング

みのこうにフェンシング部ができたのは、昭和53年に山びこ国体があったからです。当時向山文人氏が長野県体育協会の理事をしていました。山びこ国体種目開催地を決めるとき、マイナー競技のホッケーとフェンシングを引き受ける自治体がありませんでした。そこで向山氏の斡旋で駒ヶ根市がホッケー（だから赤穂高校はホッケー部）、箕輪町がフェンシング会場を引き受けることになりました。高校生中学生の頃から選手を育てるためにみのこうにフェンシング部をつくり、町では日大の茅野さんを頼んで指導してもらいました。

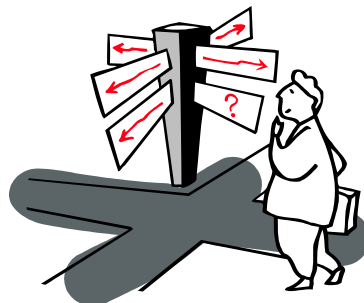
その結果、本番の国体ではみごとに劇的な逆転優勝を飾ることができました。そのときの光景を見ていた人たちは、今でも感動を忘れることができません。優勝の効果は10年くらいあったそうです。町のフェンシング施設を使った合宿や大会が開かれて、寺平さんの旅館も繁盛したそうです。箕輪町長は今でも長野県フェンシング協会会長です。

町の人たちは再びみのこうが全国優勝する日を待っているそうです。

7) 高校改革プランについて

長野県の県立高校を「適正配置」し直すための「高校改革プラン」というものが進められようとしています。一定の規模以上の生徒数がないと、その高校を他の高校と統合したり廃校にしたりするという「高校改革プラン」ですが、生徒数300人あまりのみのこうもこのままで行けば対象校になってしまいそうです。「どうなりますか」という質問に対して、出席の全員が「みのこうは自分たちの母校だから無くなって欲しくない」という意見でした。同窓会長の神子柴さんからは、「現在学校と箕輪町、南箕輪村それに同窓会で箕輪工業高等学校の存続を求めて運動を始めています。議会で決議し、県へ陳情もする予定です。みなさんも箕輪工業高等学校がずっと続くようにがんばってください。箕輪工業高等学校が本当に大切な学校なら残ることができると思います。町の人たちもそう考えています。」とお話がありました。

学校がこの箕輪町にあり続けるかどうか、これからの私たちの行動にもかかっています。



「春雷をよぶ声」にみる箕工の15年(1971~1985)

年度	できごと	記事
1971	県内交通事故多発高校ワースト1	重傷含み19件・一時期に8人福島病院に入院
1972	県内交通事故多発高校ナンバー2	
1974	県内交通事故多発高校ナンバー9	バイク死亡事故1件
1975	県内交通事故多発高校ナンバー9	バイク死亡事故1件
	箕工教育改革方針確立	魅力あふれる箕工の教育めざして - 地域・父母の願いにこたえて
1976	定時制基礎学力補充教育開始	バイク死亡事故1件
	地区懇談会で"基学"説明 1月~2月	
1977	全日制基礎学力補充教育開始	"基学"の始まり
	PTAが遅刻指導・見回り	
	バイク通学禁止・四無い運動	免許を取らない・バイクを買わない・乗らない・乗せてもらわない
	県が箕工・工業科の募集停止発表	学校には事前説明いっさい無し(県産業教育審議会第2次答申)
	箕工「改善委員会」方針	「普職併置」を職員会決定
1978	自主活動の育成	バイク事故ゼロになる
	校内研究会	(1)箕工祭へのとりくみを通して自主活動をどう発展させるか (2)自主的集団規律をどう確立するか
	「箕工祭公開基準」設定	従来1年おきの文化祭公開が「条件を満たせば」毎年公開に
	学校行事の充実	クラスマッチ・弁論大会・交流会・講演会・文化祭・臨海教室・ 登山・修学旅行・遠足(春秋)・競歩大会・討論会
	"基学"不合格者増加	追試対象者増加、クラブ・委員会活動に支障
1979	県教委が県会に「箕工工業科廃止」方針明示	県産業教育審議会答申の具体化
	「併置委員会」を設置して運動	「箕工協力組合」中心の運動・陳情・意見書・県教委の現場意見聴取
	箕工進学の手引き発行	「われらの学校」箕工進学の手引き、1000部印刷、中学校へ配布
	生徒会「学習委員会」発足	「基学クラスマッチ」などで全員合格をめざす
	県「教員人事異動要項」実施	教員の異動サイクルが速くなり、箕工職員集団の交代が進む
1982	「自主ゼミ」開始	普通科全員必修選択・学年混合の異年齢集団による「文化活動」
	「箕工工業科廃止方針」中絶	
	県「上伊那南部地域高校新設」計画を断念	中学卒業生急増に合わせ、1985年4月飯島町近辺に開校予定だった
1983	全校平和学習(12月8日)	箕工平和宣言発表集会(クラス平和宣言・学校平和宣言)
1984	臨海教室を臨海訓練へ	1年生全員3km遠泳
	職員会議で1学級増受け入れを決定	受け入れ条件 = 進路保障を考慮して、電気科の1学級増を希望する

「春雷をよぶ声」にみる箕工の15年(1971～1984)

1 バイク四ない運動

1971	県内交通事故多発高校ワースト1	重傷含み19件・一時期に8人福島病院に入院
1972	県内交通事故多発高校ナンバー2	
1974	県内交通事故多発高校ナンバー9	バイク死亡事故1件
1975	県内交通事故多発高校ナンバー9	バイク死亡事故1件
"	箕工教育改革方針確立	魅力あふれる箕工の教育めざして - 地域・父母の願いにこたえて

1960年代の後半から長野県下の高校ではバイク事故が多発していた。上伊那各地から生徒が通ってくるようになった箕工も同様で、毎年生徒のバイク事故に悩んでいた。県教委の統計では常にワースト上位をしめ、1971年度にはついに県一位の事故多発高校になってしまった。この年度は重傷を含めて19件の事故が起きた。一時は地元病院の外科に8人同時に入院し、腹にすえかねた病院長が学校に抗議に来たと伝えられている。

最初から、バイクは危険な道具だからと禁止するのではなく、「危険だから注意して安全にさせる教育」を進めた時期もあった。バイクに乗る生徒は全員、校内の交通安全委員会に組織し、バイクに安全に乗るための綿密なルールと安全学習、バイクの点検等を行った。しかしバイク事故は多発した。

そこで、学校は生徒の生存権と学習権を守る場所であるとして、バイク事故絶滅のために「危険だから乗せない教育」に転換、三ない運動を始めた。それに「保護者等のバイク以外には乗せてもらわない」が加わって四ない運動を展開、1978年度以降バイク事故ゼロが続いている。

四ない運動

- バイクに乗らない
- 免許(原付許可証も)を取らない
- バイクを持たない
- 乗せてもらわない

1980年代半ば以降、バイクに乗りたい生徒とのせめぎあいは日々行われている。バイクに乗せたい親が増えていることも事実で、三者の議論が欠かせない。

1975年度後半には「箕輪工業高等学校教育改革方針」を打ち出した。これは当初職場会で提案され、数多の討議を経て最終的に職員会で決定した。同時にこの「教育

改革」を推進する機関として「箕工教育内容・方法改善委員会」(＝改善委員会)が設置された。

2 石の上にも“基学”……年

1975	箕工教育改革方針確立	魅力あふれる箕工の教育めざして - 地域・父母の願いにこたえて
1976	定時制基礎学力補充教育開始	バイク死亡事故1件
	地区懇談会で“基学”説明 1月～2月	
1977	全日制基礎学力補充教育開始	“基学”の始まり
	PTAが遅刻指導・見回り	
	バイク通学禁止・四ない運動	免許を取らない・バイクを買わない・乗らない・乗せてもらわない
	県が箕工・工業科の募集停止発表	学校には事前説明いっさい無し(県産業教育審議会第2次答申)
	箕工「改善委員会」方針	「普職併置」を職員会決定

基礎学力の充実と自主活動の育成を教育目標に掲げ、生徒の実態を正確に把握するため1976年度には「学力診断」を行った。その結果

これでは全ての教科の授業が分からないはず

これでは社会生活にも困難をきたす

個々の教科の範囲内では解決不可能、全教師の力で組織的・計画的に

基礎学力不足克服の重要性を生徒たちに認識させ、自主的な学習運動として発展させる方向で

この事実を保護者に知らせ、基礎学力補充の意図と意義を理解してもらい、協力を得る

こととなり、定時制は1976年12月から基礎学力補充のドリル学習に取り組み始めた。一方全日制はその冬いっぱい地区懇談会を開催して、4月からの基礎学力補充の取り組みに保護者の理解と協力を求めた。こうして1977年4月から後に「箕工の教育」の一環として全国的に知られる“基学”が始まった。PTA役員も“基学”に遅刻者が出ないよう、学校周辺の見回りを行うようになった。

この取り組みは確かに生徒のやる気と学校全体の勉強するムードを作りだし、「基礎学力」補充も目に見えて効果を上げていった。しかし始業を早めてドリルを行い、合格点

を取れるまで(つまり分かるまで)補習と追試をするというシステムは、開始から1年半で大量の不合格者を生み出すようになった。

そこで「生徒集団の学習運動」としてこの問題を解決するために、生徒会に「学習委員会」が組織された。「基学旬間」「基学クラスマッチ」などの企画によって、不合格者問題はある程度解決された。

全校あげて基礎学力補充に取り組んでいるさなかの1977年10月、県教委は県産業教育審議会の審議内容をリークする。「箕工工業科募集停止」は事前に学校への連絡も無かったという。これに対し職員会議では「普職併置」が箕工のあり方としてふさわしいと結論した。地域に根ざした学校にするために、普通科も工業科もあり男子も女子も入学できる学校として育てることにする。そのため普通科の生徒が毎年一度は工場見学し、工業基礎2単位を必修とした。さらに電気や機械の科目を商業科目などと一緒に選択できるようにした。また機械科と普通科の生徒をミックスして男女共修家庭科を実施した。

しかし県教委は1979年7月県会で「箕工工業科廃止」方針を明らかにした。箕工では「併置委員会」を作って活動を開始した。PTA・同窓会・地元2自治体で作る「箕工協力組合」に呼びかけて、県へさまざまな働きかけをした。陳情・意見書など思いつく限りの手だてを講じた結果、ようやく1982年になって「廃科方針」の土台となった県産業教育審議会第二次答申が廃棄された。

3 自主活動の育成「箕工祭公開基準」

1978	学校方針「自主活動の育成」	この年からバイク事故がゼロになる
"	校内研究会	(1) 箕工祭へのとりくみを通して自主活動をどう発展させるか (2) 自主的集団規律をどう確立するか
	「箕工祭公開基準」設定	従来1年おきの文化祭公開が「条件を満たせば」毎年公開に
	学校行事の充実	クラスマッチ・弁論大会・交流会・講演会・文化祭・臨海教室・登山・修学旅行・遠足(春秋)・競歩大会・討論会
	「基学」不合格者増加	追試対象者増加、クラブ・委員会活動に支障
1979	県教委が県会に「箕工工業科廃止」方針明示	県産業教育審議会答申の具体化
"	「併置委員会」を設置して運動	「箕工協力組合」中心の運動・陳情・意見書・県教委の現場意見聴取
	箕工進学の手引き発行	「われらの学校;箕工進学の手引き」1000部印刷、中学校へ配布

1979	生徒会「学習委員会」発足	「基学クラスマッチ」などで全員合格をめざす
	県「教員人事異動要項」実施	教員の異動サイクルが早くなり、箕工職員集団の交代が進む

“基学”が軌道に乗りバイク事故がなくなった1978年度の夏から、箕工教育改革は「自主活動の育成」へ向かう。校内研究会のテーマは次の2点を中心になった。

箕工祭へのとりくみをとおして自主活動をどう発展させるか
自主的集団規律をどう確立するか

当時箕工祭は非公開の校内祭と公開祭が隔年で行われていた。どちらも全体としては盛り上がり欠け、教師側から見て好ましくない行動も多くて、職員間では箕工祭の教育的意義も問われている時だった。1978年は非公開の年に当たっていたが、学友会執行部は会員の要求を背景に学校に対して「公開祭」を要求した。この要求自体は非公開の年の年中行事のようなものだが、職員会は初めて「箕工祭公開基準」を学友会に突きつけた。

箕工祭公開基準

前文 省略

公開基準

- 1 学習・研究や文化活動の成果の発表が公開にふさわしいものとして準備されているか
 - 計画書が具体的に作られているか
 - 遂行が着実になされているか
 - 発表内容が高校生としてふさわしいか
- 2 全生徒団結のもとにすすめられているか
 - 全ての生徒が準備・発表に積極的に参加しているか
 - 箕工祭へのとりくみをとおして友情と連帯が深められるか
- 3 高校生らしく風紀を高め維持できるか
 - 本校の生活規律がきちんと守られているか
 - 外来者を迎えるにふさわしい礼儀と態度が自主的にとれるか

箕工祭公開基準を受け入れた学友会執行部は、基準に到達するための努力や会員への呼びかけをおこなっている。この基準は箕工が地域社会に受け入れられるための基準でもある。執行部は「今年の箕工祭を公開にするため」であっても、とにかく服装や暴力問題に正面から取り組み生徒集会を開きキャンペーンをおこなう。そうやって「基準から外れた現実」を克服することは、同時に箕工が地域の高校としてふさわしい姿を勝ち

取っていく過程にもなっていた。地元中学生向けに発行していた「われらの学校；箕工進学の手引き」にも、“基学”と共に箕工祭が誇らしげに語られている。

こうした取り組みを陰で支えていたのは、箕工に長年勤務する教職員だった。しかし、1979年度末人事異動に当たって県教委が打ち出した「教員人事異動要項」は、教職員の異動サイクルを格段に早めてしまった。“基学”や自主活動育成を通して生徒の変化を目の当たりにした教職員は、要項実施後数年でほとんど異動してしまった。

4 一冊10,000円…自主ゼミ…

1982	「自主ゼミ」開始	普通科全員必修選択・学年混合の異年齢集団による「文化活動」
〃	「箕工工業科廃止方針」中絶	
	県「上伊那南部地域高校新設」計画を断念	中学卒業生急増に合わせ、1985年4月飯島町近辺に開校予定だった
1983	全校平和学習(12月8日)	箕工平和宣言発表集会(クラス平和宣言・学校平和宣言)
1984	臨海教室を臨海訓練へ	1年生全員3km遠泳
〃	職員会議で1学級増受け入れを決定	受け入れ条件＝進路保障を考慮して、電気科1学級増を希望する

「総合的な学習の時間」の取り扱い方や内容が、今日的な教育課題として高校でも浮上している。「自主ゼミ」は総合的な学習ではなく、まさに「総合学習」として箕工の普通科に根付いていた。自主ゼミは「高校生らしい自主的な学習方法を生かし、自分の学びたいテーマを選び自主ゼミが開かれます。週一度一時間のこの研究会を基礎に自主的な活動をすすめて、文化祭で発表」するもので、普通科の1年から3年までがテーマ別に異年齢集団を形成して活動していた。箕工ではすでに文化系クラブが衰退して久しかった。1978年度から箕工では「箕工祭への取り組みを通して全校集団づくりを！」を目標に自主活動の育成に力を入れてきた。自主ゼミはさらに「文化的質」の向上をめざして、1982年度から取り入れられた。

文化祭には自主ゼミの研究成果が展示され、見応えのあるものになった。1984年度の文化祭では次のような展示が行われていた。

陸軍伊那飛行場
ペン習字

地域社会研究ゼミ

表札	刻字	
パズル・数学の歴史	数学ゼミ	
七宝焼き	機械科ゼミ	天文ゼミ
校舎縮小図	測量ゼミ	
洗剤の害	食生活ゼミ	
ホップスの英訳テキスト自作販売	英語ゼミ	
上伊那の文学者研究	上伊那文学ゼミ	

陸軍伊那飛行場はアジア太平洋戦争末期に伊那町の六道原(現・伊那市上の原、六道原)に隠匿飛行場として作られた。飛行場建設には地元の国民学校や中等学校等から勤労働員された子どもたちが多数当たるとともに、朝鮮から連行されてきた農耕隊も加わった。飛行場は現在も通称地名になっていて、地元の人々の記憶にはあるが正確な記録も調査もされていなかった。それを箕工の自主ゼミで初めて調査して、1984年の箕工祭で発表した。これは飛行場に関わったことのある人々や研究者の関心を呼んだ。できあがった冊子を見て、元特攻隊の飛行士だった真名志(しんなし)さんは「同期の人たちは一万円出しても喜んで買う」と言い切った。これを聞いてはじめて、調査に当たった生徒たちは、自分たちの研究の価値を実感することができた。

1983年12月8日、全校生徒職員が体育館に集合して平和学習が行われた。各クラスの代表がクラス平和宣言を読み上げ、最後に箕輪工業高等学校平和宣言が川上輝校長によってゆっくりと心をこめて読み上げられた。上農と箕工が先鞭をつけた全校平和宣言は、その後長野県内ほとんどの高校で取り組まれる壮大な実践運動に発展していった。

「箕輪工業高等学校平和宣言」

未来に生きる

若者たちに

縁につつまれた

平和な地球を

手渡すことが

現在に生きる

私たちの 務めです

昭和58年12月8日

1980年代は学校行事が「学校づくり」の中心に据えられた時期でもあった。以前から行われていた行事も、生徒の実態に応じて内容が再検討された。臨海訓練もその一つ

だった。箕工では毎年1年生対象に臨海教室が行われていた。1984年は転勤してきた体育教員の実践経験から、1年生のいちばん楽しい思い出になっている臨海教室を、もっと楽しいものにするために遠泳を組み込んだ。感想文を見る限り、生徒はそれぞれの困難を乗り越えて「さらに楽し」かった経験にしているようだ。また「われらの学校 - 箕工進学の手引き - 」には、行事が多くて楽しい学校だということが強調されている。

1980年代中頃の学校行事

1 クラスマッチ(4回) 計5日間

球技(2回)・陸上

基礎学力クラスマッチ

2 競歩大会

3 遠足(2回)春・秋

4 文化祭 三日間

5 学年行事

1年 海水浴

2年 修学旅行

3年 登山(仙丈・甲斐駒ヶ岳)

6 スキー教室(二泊三日)

7 芸術鑑賞

8 弁論大会・討論会

5 「箕工の教育」とは何だったのか

1985年1月に発行された「春雷をよぶ声」によって、1971年から1974年までの困難な学校の状況と、1975年から1985年の「箕工の教育」をたどってみた。「春雷をよぶ声」には久保田誼さんによって、1975年から1985年2月までの「箕工の教育」がドキュメンタリー風にまとめられている。この本には、1975年11月の「箕工教育改革方針」提案と決定までの経緯が何回も登場する。その途上で策定された箕工の教育目標が、その後の「箕工の教育」の原点になっていることが理解できる。

箕工の教育目標は次のようなものだった。

(われらの学校 - 箕工進学の手引き - より)

豊かな未来をきりひらくことのできる学力をすべての生徒に

わが校の教育内容

- 国民的教養と生産・生活技術の基本を -

教育目標

箕輪工業高等学校(機械科・電気科・普通科)

めまぐるしく変化する社会にあって、次代をになう青年によせる父母や地域社会の願いをしっかりと受けとめ、なによりも生徒たちがやがて職場や地域、そして家庭生活のたくましい担い手となって、自らの豊かな未来をきりひらくことのできる力の基本をしっかりと身につけることをめざし、次の教育目標をかかげてその実現をはかる。

- 1 自然や社会についての正しい知識を身につけ、これを基礎に生産・生活に対する専門的な知識や技術の基本を身につける。
- 2 健康に留意し身体をきたえる。
- 3 消費をあおる退廃的な文化にながされず、未来に目標をもち、これに向かって希望と信念をもって誠心誠意努力できる生活態度を身につける。
- 4 勤労を尊ぶ正しい考え方や態度を身につけるとともに、実践的能力を身につける。
- 5 人命を尊重することを中心として、正しい市民道徳を身につけ、特に交通安全など安全教育に力をいれる。
- 6 自分たちの問題を自分たちの力で解決できる自主自律の態度、能力を身につける。

こうしてかいま見た「箕工の教育」の10年間は、生徒の実態と父母・地域の教育要求に根ざした教育実践を学校ぐるみでおこなった時期だといえる。「父母・地域と手を結んだ教育」は1974年6月から全国的に始まったもので、上伊那の各校はそれぞれの実態に即した「父母・地域と手を結んだ教育」をすすめている時期だった。

高校進学率が90%以上になって相当の年数が経過し、多くの生徒は義務教育の9年間で解決できなかった様々な問題を抱えたまま箕工へ入学してきた。暴力・荒れ・低学力・無気力などなど。高校生活に慣れないまま、退学していく生徒もあった。そんな様々な困難を克服する手だてとして、箕工では「基礎学力補充」と「自主活動の育成」を中心にした学校づくりをおこなったのだ。

しかし、箕工をとりまく状況は常に厳しかった。中学校による「高校格付け」では、上伊那郡内で常に下位に位置づけられていたように思われる。その上県の教育行政によって使い回しにされ、方針転換の安全弁にされてきた。学科転換・廃科方針・学級増・学級減などなど。「教職員人事異動要項」実施もせつかく軌道に乗ってきた「箕工の教育」に大きな影響を与えた。新任職員対象にオリエンテーションをして乗り切ろうとしているが、これがいつまで有効だったのか疑問も残る。

感想

みのこう調査を終えて

1年 渡邊 賢

図書委員会が、箕工祭で展示するのは箕工の歴史になった。

まず、この箕工を卒業した人たちに話を聞いて、それをまとめることにした。同窓会長の神子柴さんに卒業生名簿をもらい、その人たちに電話で、アポを取り、そして行った。夏休みだったので、予定が入っていて行けなかった。先生と委員長と副委員長が、何件か伺っていた。一日だけ空いている日があり先生と委員長と副委員長と僕で伺った。いろんな話を聞いた。そして、メモを取っていった。貴重な話をしていただいた。

僕には、とても難しい話だった、自分の考えがとてもあまいことに気がついた。今は高校ぐらい当たり前だけど、昔はそんなに裕福なかっていはそんなに無いのに親が、せめて高校ぐらい行かせてあげようと頑張っていたんだと改めて思いしらされた。そんなことを思っていたら時間がきた。今日一日だけで、自分の足が一步も二歩も進んだような気がする。

そんななか、僕がやることになったのは、箕工の学校名と卒業生数を模造紙にまとめる作業だった。これは、同窓会名簿でその年の卒業人数を調べた。そのなかで解ったことは最初は卒業生数が十数人だったのが、一番多い年で約三百人もの生徒がこの箕工でいろんな事を学び、いろんな事があり、そして卒業していった。

そんな箕工もいつか廃校になるかもしれないと思うとあまりにも悲しい。せめて孫の代までこの箕工がなくならずに残って欲しいということを考えていた。いろんな思いがこもった模造紙を箕工祭でいろんな人に見てくれたせめて地域の人たちが箕工はあってもいい高校だと思ってくれれば、いいと思った。

1年 大槻 瞬

十月のある日、何気なく図書館へ行った。そこから俺の仕事が始まった。初めは単なる友だちのお手伝いでも、作業をやっていくうちに自分から仕事にのめり込んでいくのが分かった。

最初の仕事は楽だった。先生の言った数字を聞き間違えないように、そして正確に書き写さなければいけなかった。そんな作業をやり続け、中盤にさしかかった頃、先生が読みあげていた本(同窓会名簿)よりも後に作られた、より正確な本があったことが知らされる。結局その資料で再スタート。そして完成。次の仕事は書いた数字を俺が読み上げることに。この作業はトラブルもなく、無事終わった。

次の作業はとっても辛くて大変だった。その数字をグラフにして、模造紙に書くという作業だった。次いで、その当時の学校名も書き、年度を書き、と色々な事を書くことになった。しかしここまで来て何も起きないというわけにはいかなかった。人数が不明の年、マスの問題極めつけは俺の下書きミス。年度、校名は友だちが書いてくれた。は、いいとしても、人数のグラフで点を打つ場所を見当違いの所へ打ってしまう俺。結局書き直す羽目に。そして文化祭の色も一段と濃くなった日、グラフは完成した。

他に展示する物も完成していくようだった。会場に張りだした後も付け加えたりした。そんな作業をやっていくうちに準備期間の三日間は過ぎ去っていった。

今思えばもっと前、そう、作業を始めた時から文化祭は始まっていた。ふとそんなことが思い浮かんだ。作業、そんな言葉を聞くと逃げ出したくなる。普通ならそうだった。でも今回の作業は違った。充実していて、新しい発見があって、笑いもあって、いろいろな人に出会って、沢山の経験が今年の文化祭には詰まっている。改めて実感。

でもたまには「俺は委員じゃあ無い。」と嘆いていたけれど。それは許して下さいな。そんなわけで、委員長、副委員長、いやむしろ作業に参加した皆さま、それと俺、ご苦労様でした。

星野里美

私は、今回箕工の歴史を調べて、思ったことは、この学校には資料があまり残っていないことに驚きました。他の学校にはたぶん資料が残っているんだらうなと思いながら調べていました。資料が少なかったので、同窓生の人たちに聞き取り調査を行ったり、座談会をやったりなど、同窓生にいろいろお世話になりました。

戦争中の学校は、ほとんど勉強をやらずに、戦争で戦う訓練をやっていて、話を聞いていて、当時は大変だったんだなと思いました。戦争のために、国民はいろいろな所で節約をして、服とかも自分の家にある着物などをバラして、縫い合わせて、服を作り着ていたそうです。今と比べるとすごい貧しい生活をしていて、この当時は、本当に大変だったんだと思いました。

今から約三十年くらい前の箕工は、今の箕工と違い、勉強を一生懸命やっていたんだと聞きました。学校に入るためのお金なども、親が必死になって出してくれたそうです。当時の学校では、朝のドリルをやったりして、基礎を熱心にやっていた事を同窓生の人たちに聞いて分かりました。私は勉強は好きでやっていた訳ではないけど、単位を取るためにやっていますが、当時の人たちは、勉強ができない(高校に入れなかった人)人たちもたぶん話を聞いていて多くいると思います。お話をしてくださった人は、私みたいな気持ちで勉強していた訳でなく好きで、勉強していて、私は高校に入れて良かったなどと言っていました。私は、その人たちの話を聞いて、今は当時に比べればすごく豊かなんだなと思いました。私も、この人たちのような心をもって、勉強を頑張っていきたいと思いました。

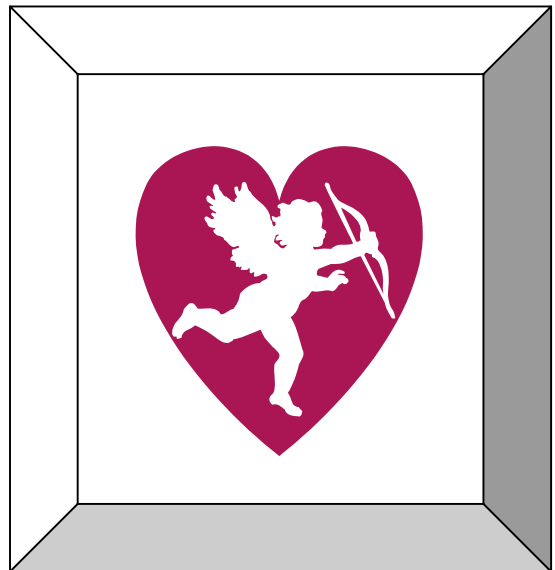
感想

八木栄里奈

聞き取り調査をして最も印象に残った話は N さんのしてくださった話です。N さんの頃の学校の服装はモンペに草履といういでたちだったそうです。私が驚いたのは「お金がなかったので草履を自分で作り、壊れたら自分で直していた。」と聞いたときです。現代では壊れていなくても流行だ、なんだかんだといってどんどん捨てて新しい物を買っています。私は物を大切にすることはとても大切なことだと思います。現代は物をどんどん作りどんどん捨てていますが、物だけでなく人間関係にもそのような考え方が入ってきているように思えます。

私が執行部に入って間もない頃のことです。あるときに「部活を二つに委員会の仕事もあるので他の人ほど執行部にでられないかもしれない。」と言ったことがあります。するとある執行部員から「なぜそんなに忙しいのに執行部に入ったの？副委員長とかわったら？」と言われてしまいました。たしかにそのとおりであり、それは彼の優しさだったのかもしれませんが、私も中途半端な気持ちで執行部に入ったわけではなかったのに、納得すると同時に腹が立ちました。当時の私には「つかえない奴は捨てて新しい人材を」と言っているように聞こえたからです。感傷的すぎるかもしれませんが「物」のように扱われているような気持ちになりとても悲しく、やる気がなくなりました。

N さんの時代にそのような事がなかったかどうかは私にはわかりませんが物をどんどん捨てているうちに人間もどんどん捨てていくようになったら怖いとおもいました。



「80年の歴史」

新井 一美

「創立100周年」という学校の話題をちらほら聞くようになった。100年といえば1世紀。確かに感慨深いものがあるだろう、とは思っていた。

本校はまだ80年。その歴史を探ろうとするに当たって、比較的気軽な気持ちでいたのは、恐らく80年の長さが分からなかったからだろう。やってみて分かった。80年だって、相当に長い！「まだ、80年」ではないのだ。「80年も歴史を刻んでいる！」なのだ。80年と言えば、人の一生。今時の人の平均寿命である。そう考えれば、やはり、それなりの年月であると合点がいく。80年というのは生半可な年月ではないのである。

私は、戦後の本校の卒業生の推移や、男女比を調べたので、いわば、数字で見る本校の歴史であったり、外側に示される歴史であった。学校というのは必ず毎年人が入れ替わる。だから中身は常に変化していて、生徒一人一人、卒業生一人一人においては、80年の中のたった3年の関わりだ。だから、常に流動的。愛着を持ってといっても、その3年間がその人なりにどのようなようだったかで、学校の印象は変わり、一律ではないだろう。しかし、本校の歴史をずっと紐解き、追っていくと、やはり1つの個体として私の前にあるのだ。また、全く外から見ている人にとっても、本校は本校として、やはり1つの個体として映っているはずだ。そういうことを考えると、本校の歴史を、(あくまで外側だけからではあるが)最も知っているのは、地元のご年配の方々なのかもしれない。

80年は人の一生と同じ長さだと先に書いたが、実は私はグラフを見て、本校がちょうど、「人の一生」とだぶって思ってしまった。何度も校名を替え、戦争の渦にも飲み込まれ、苦しんだろう若い時代。そして、戦後の教育改革後、工業科を新設し、校名も今の「箕輪工業高校」となってからは、いわば人間という壮年期。創立35周年、県立移管10周年を祝う会の資料だけはたまたま残っていたが、それを見ると、町中をパレードしたり、盛大な祝典だった様子が伺われる。その頃が本校の壮年期の始まり。ちょうど電気科も新設され、機械科、普通科、そして定時制機械科。多くの科が並立し、学校としての安定期に入っていたように感じる。この時代は、ちょうど、日本の高度経済成長期の頃にも当たる。

しかし、平成に入った頃から変わってくる。内部で抱えていた色々な問題が外にも見えていたのだろうか、この地域の中学生に不人気で、募集する生徒の人数が集まらない状況が続き、また退学する生徒も多く、卒業生は激減した。もちろんこれも、子供数の急激な減少と重なるためでもあるが、バブルがはじけた時期にも重なって、やはり世の中と連動しているように思われた。また、近くの学校との関係が反映してい

たのだろうとも思う。

しかしこの減少傾向を老年期として捉えたとしたら、やはり寂しい。

私が「壮年期」と捉えた時期にも、危うくこの学校がなくなりそうだったことがあるようで、やはり、数字では分からないものがあると思われた。が、しかし、ちゃんと今に至るまで箕工は存続している。その時その時の内部の努力というものが、数字には表れないにしても、しっかりあったのである。それはやはり、その当時この学校にいらっしゃった方々にお聞きすれば分かることであろう。

昨年度、機械科・電気科が統合され総合工学科が誕生した。これまでどおりの普通科2クラスと合わせ、1学年3クラスとなった。これは縮小ではなく再編である。「新箕輪工業高校」になった、と私は捉えたい。日本工業大学との「高大連携」の調印もなされ、老年期に入ったのではなく、これから新しい箕工が始まると思いたい。

先に「地元のご年配の方々が、本校の歴史を最も知っているかも・・・」と書いた。やはり、この学校がこの箕輪の地名を冠している以上、地元の人々に愛され、地元と密着し見守られていくのが最も良い形なのではないだろうか。この学校ができるとき、一番ご努力いただいたのは、当時の地元の方々だった訳であるのだし。

何はともあれ、弱小図書委員会の研究「みのこうの歴史」はなんとか出来上がりそうだ。資料の少なさに愕然としながら、だからこそ、「大正14年度」と書かれた卒業生名簿を見つけた時の感激や驚きは、歴史を探る者ならではの感慨だったろう。紙の薄さ、めくりにくさ、年度により書き方が異なり、その統一性のなさなどをぼやきながらも、どこかわくわくしながら生徒台帳を1ページ1ページめくり、数を数えていったのは、私にとってこの上なく貴重な経験であった。なるべく正確にと思い、何度も数え直したり、記入し直して、やたら時間がかかったにも関わらず、まちがいをきつとあるかもしれない、と今思ってもいる。

とにかく「歴史を調べる」ことの大変さを垣間見たと言ったらいいかもしれない。紀元前に完成されたあの『史記』が、いかに偉大な作業だったか分かったような気がする、などと言ったら、あの世にいる司馬遷に大笑いされるかもしれないけれど・・・

「箕工の教育」とは

井上志をり

教育研究者や他県の教員に自己紹介するとき、「長野県の箕輪工業高校から来ました」と言うと「え？あのミノコウですか。『箕工の教育』で有名な。」と返されることがたびたびある。それほど箕工の教育は有名だった、などということを知っている箕工の関係者は、現在どのくらいいるのだろう。そういう私も「基学」「バイク四ない運動」などに代表される「箕工の教育」の、現場に立ち会ったわけではないのだ。知らない私は、「『春雷をよぶ声』をお読みになったのですね。今の箕工は、あの頃とはまた違っていると思いますよ。」と答えるしかなかった。

長野県でも教育改革が滅茶苦茶なスピードで進展している。高校に限れば、最後は「高校改革プラン」によって高校統廃合が行われるのだろう。中間報告などのいろいろな情報から読み取る限りでは、地域高校と言われている学校の多くが廃校に追い込まれることになる。現在の箕輪工業高校も、廃校条件に合致した高校に入っている。本校はそんなに簡単に廃校になってもいい学校だったのだろうか。80年を超えた本校の歴史を知ってもらい、そこからみんなに考えてもらおうというのが今年の図書委員会の出発だった。

ところが本校にはまとまった「学校史(誌)」が無かった。資料を集めたが、学友会誌、町史、町の小学校誌、PTA新聞、同窓会名簿くらいしか見つからなかった。そこで歴史の生き証人である同窓生からの聞き取りで歴史を綴ってみようということになった。始めてみたが80年の時の流れは図書委員にとっても私にとっても想像以上に長かった。

私が担当したのは、その時々本校で学んだ人をとおして学校の姿をかいま見ること、同窓会名簿にあった「沿革大要」を教育史・学制史などと照合して、本校の存在意義と根拠を明らかにすることだった。さらに久保田諒著「春雷をよぶ声」を分析して、「箕工の教育」の描きなおしを試みた。

そうした作業を図書委員たちとしていて、私から離れなかった思いは「なんと健気な学校であることよ」だった。みのこうも前身が中等学校ではなかった他の高校と同じように、地元の人々の努力で維持された学校だったのだ。小学校に付設された裁縫学校から始まり、通年制実業補習学校として地元で農業や商売にいそむ人を育てた。実業補習学校だったが為に1935年(昭和10年)には、強力な兵を養うために戦時体制として創設された青年学校になってしまう。それでもこの時代の人たちは、「勉強」が嫌いだと言った人さえ当時の教科書を大事に保存していたし、読本で何を讀んだか即座に答えることができるのだ。

戦後、県立高校に移管されてからのみのこうは何回か名称を変えている。中箕輪高校 箕輪高校 箕輪工業高校、国や県の経済政策や教育政策に応じて総合高校目指してコース制を取り、工業立国を目指した時代には普通科に工業科を併設して工業高校となり、校名もそれに依りて変化したということらしい。この変遷が生んだらうドラマが全く残っていないのは残念としか言いようがない。唯一、県産業教育審議会の方針で1979年に工業科が

廃止になりそうになった時のことが、「春雷をよぶ声」にドキュメンタリータッチで描かれているのが救いだっただ。

基学(基礎学力回復の取り組み)もバイクの「安全教育を徹底して乗せる」から「四ない運動」への転換も、自主活動育成のさまざまな取り組みも、みのこうに通ってくる生徒の実態を踏まえた上で行っている。しかし周囲の目はそういう努力に正当に報いてこなかったのではないか。「箕工」が悪戦苦闘している時期に私は他の学校にいて、箕工の取り組みにはほとんど関心を払っていなかったように思う。もちろん「春雷をよぶ声」は発行当時に読んだ。すごいなあと思ったがそれだけだった。

今度調査をしてみて驚いたのは、あの基学の取り組みを、ずっと昔に卒業したはずの同窓生がずいぶん評価していることだった。「あの頃の先生たちは本当に熱心だった。」「朝早くから補習をやってくれて、合格するまで子どもの面倒をみてくれた。」等々。当時、基学は地域の人にも相当知られていたということなのだろう。「あの頃は」という言い方は、毎日家の前を通る生徒を見ていて、自然に感じ取っていることなのだろう。今はなぜやらないのかという問いに、毎日の授業の中で学力保障のための手当がされていることを説明すると一応は納得してもらえる。けれど目に見えることも大事なのかも知れないと考えさせられた。

基学をしていた時期の卒業生からは文書で回答がよせられた。(追加資料1 2)在学中は面倒だと思い、大して役に立つとも思っていなかったようだ。しかし卒業してから役に立っている、その当時のほうが生徒の学力があったと感じている。補習をしてほしいとはっきり書いてもいる。

図書委員会の限られた活動時間では、ごく少数の人の話しか聞くことはできなかった。それでも図書委員は新鮮な驚きと刺激を受けている。また同窓生も久しぶりに生身の高校生と話してみて、遠くから眺めているだけの時とずいぶん違う感じを持ったようだった。「あんたたちは別だけれど」と言いながら、高校生批判も聞かされた。図書委員たちはそれを真摯な態度で聞いていた。こんなところから箕工生が地元の人たちに再び理解され、隣人として受け入れられるきっかけが生まれるような気がした。

「みのこうの歴史」を一冊の書物に書き表す時はまだまだ先なのかも知れない。その時がくるまでこうして丹念に行う聞き取りのような活動が、「みのこうの歴史」のつづれ織りを一針ずつ完成に近づけるのではないだろうか。

{追加資料 1}

「箕輪工業高等学校」の時代に学んで

米山由美(よしみ)さん

1 プロフィール

昭和46年4月入学

長野県箕輪工業高等学校

昭和49年3月卒業

同上

・ 入学の動機

工業高校を経て製造業に就職するつもりで箕工にはいった。家は農家で父は当初高校進学に反対していたため、母が父を押し切る形で入学した。

機械工学を勉強したかったため - 専門知識を身につけたかった

・ 楽しかったことは

クラブ活動・部活動

・ 先生に大切にされましたか

まあまあ大切にされたと思う

2 学校のこと

一部番長グループ等反抗的な生徒もいたが、大部分は真面目で、クラブ活動を通じ楽しく3年間を過ごすことができた。南アルプス登山では卒業したクラブの先輩も同行したこともあり、楽しい思い出となった。

3年保健体育は床運動の卒業試験があり、3学期終了後も半数あまりの生徒が補習を受け(合格するまで)、自分もその一人だった。

・クラス人数 43人 学年 170人

・機械科 2組(男子のみ) 電気科1組(うち女子2名)

・普通科 1組(女子のみ) 計 4クラス

1年次は男女混合クラス、2年から科別に編成替えになった。

・教科目 現代国語、数学、物理、化学、保健体育、英語、材料力学、製図、機械力学、機械実習、図学等機械科関係科目の他に電子工学、電気実習があった。

・服装 黒の詰め襟学生服その下はワイシャツ

・昼飯 弁当を持参するか学校の売店のパン

2時間目終了後の休み時間に弁当を食べ、昼休みにパンを食べることもよくやった。

・学校の事件

1年生の時にバイク事故が多発したため、生徒会で自主的にバイク通学を禁止した。それ以来バイク通学禁止となる。

2年の時(？)我が校と岡谷工業高校の番長グループ同士で争いがあり、ナイフの斬り合い事件が起きる。事件現場は天竜川原。

・行事

文化祭 - 3日間・・・クラス展 部活展 演劇部発表 バンド発表等
ファイアストーム(最終日)

競歩大会 クラス対抗全校体育祭

登山(2年の時) 修学旅行

・学校生活への満足度

クラブ活動を通じて友人が増え、楽しい学校生活を送ることができた。部活の仲間とは今でも友人関係が続いている。

3 現在の「みのこう」について 「みのこう」に対する要望他

先生と生徒の距離が私たちの頃より縮まっているように見え、良いように思われます。しかし上下関係や規律の面では、もう少し厳しくした方がよいように思われる。

またこの年頃は友だちなどを通じて内面的に成長し、外に向けて行動も広がって行くものですが、最近の子どもたちを見ているとテレビゲーム等で家に籠もっている時が多いように思う。

昔より生徒の学力が下がっているように見えます。高校までの学力が社会に出てから一番大切だと思います。補習等を行いもっと厳しく教えて頂きたい。

また、近年ははっきり挨拶ができない若者が多いです。社会生活では、特に仕事の上でも何をやるにも挨拶は基本です。はっきり喋れる若者を育てて欲しい。

日本の経済は工業が基盤です。しっかりした専門知識を身につけた生徒を社会に送り出していただきたい。

{追加資料 2}

在学中に基学を経験したが、2年の時に基学が無くなった

(調査用紙に記入して回答)

宮澤美和さん

1 プロフィール

入学年 1992(平成4)年4月 箕輪工業高校

卒業年 1995(平成7)年3月 箕輪工業高校

2 入学の動機 まわりの人たちの期待

普通科で学びたいと思った

3 学校の雰囲気・印象に残っていること 地域との関係

箕工 = (イコール)ヤンキー(不良)とされていたと思う。

2年生の時の文化祭が楽しかった。

基学について

(どんなことをしていたのか) 毎朝授業が始まる前に基学の時間があり、国語・数学・英語をやっていた。小テストがあり、テストの点数と出席回数が足りないと進級できなかった。

(当時どう感じていたか) 当時は正直言って面倒だと思っていた。最近ではパソコンなどが普及してきて、字を書く機会が少なくなったので、漢字を前より忘れていく気がする。このような時代なので基礎学力をつけるのは良いことだと思う。

(なぜ無くなったのか知っていますか) 2年になる時なくなったが、理由は分からない。

制服廃止前後の状況

先生の中から私服化へという意見があったようだが、当時人から聞いた話なので詳しくは知らない。

私が入学した時は私服になって何年かたっていたが、ほとんど全員と言って良いくらい制服を着ていた。それについて先生が「制服の亡霊が根強く残っている」というようなことを言っていた覚えがある。3年の頃には私服を着る人の方が多くなった。私は冬服は作ったが夏服は持っていなかった。

入学式の時は1年生のうち一人をのぞいて全員制服を着ていた。(つまり皆制服を作った。)

行事の時は制服がほとんどだったが、だんだん私服が多くなってきた。後輩たちも

だんだん私服になれてきた。

4 学校生活への満足度

社会に出てみると学校生活は楽しかったなあとと思う。

5 現在のみのこうについて

活気(元気)が無いと思う

6 みのこうに対する要望 他

自分の母校が無くなるのは寂しい。生徒一人ひとりが目標を持って、活気が出てきたらいいなと思う。

{追加資料 3} 制服

箕工祭には是非かつての制服を展示したいと思っていました。箕工の制服は紺のセーラー服に黒いリボンでした。特に夏の制服は白ブラウスに紺のセーラーカラーとネクタイがキュートで、女子中学生のあこがれでもありました。とにかく貸していただける方を探したのですが……

制服は卒業生のかたからお借りしました。

箕工では卒業と同時に制服を、新たに入学する後輩に譲ることが多かったようです。そのため持っている人を捜し当てるのに苦労しました。

この制服は1992年の制服廃止直前の物らしく、かなり改造されています。

改造箇所 = ログ無し スカート丈 上着丈

女子制服規程

紺のセーラー服 白線2本 ネクタイ止めに「m」のロゴ

ネクタイは黒の三角巾

スカートは紺のくるまヒダ(スカート丈 床上 30cm)

夏服

白のセーラーブラウス 紺襟に白の2本線

ロゴ入りネクタイ止め 黒ネクタイ

スカートは冬服と同じ

近代日本の学校制度

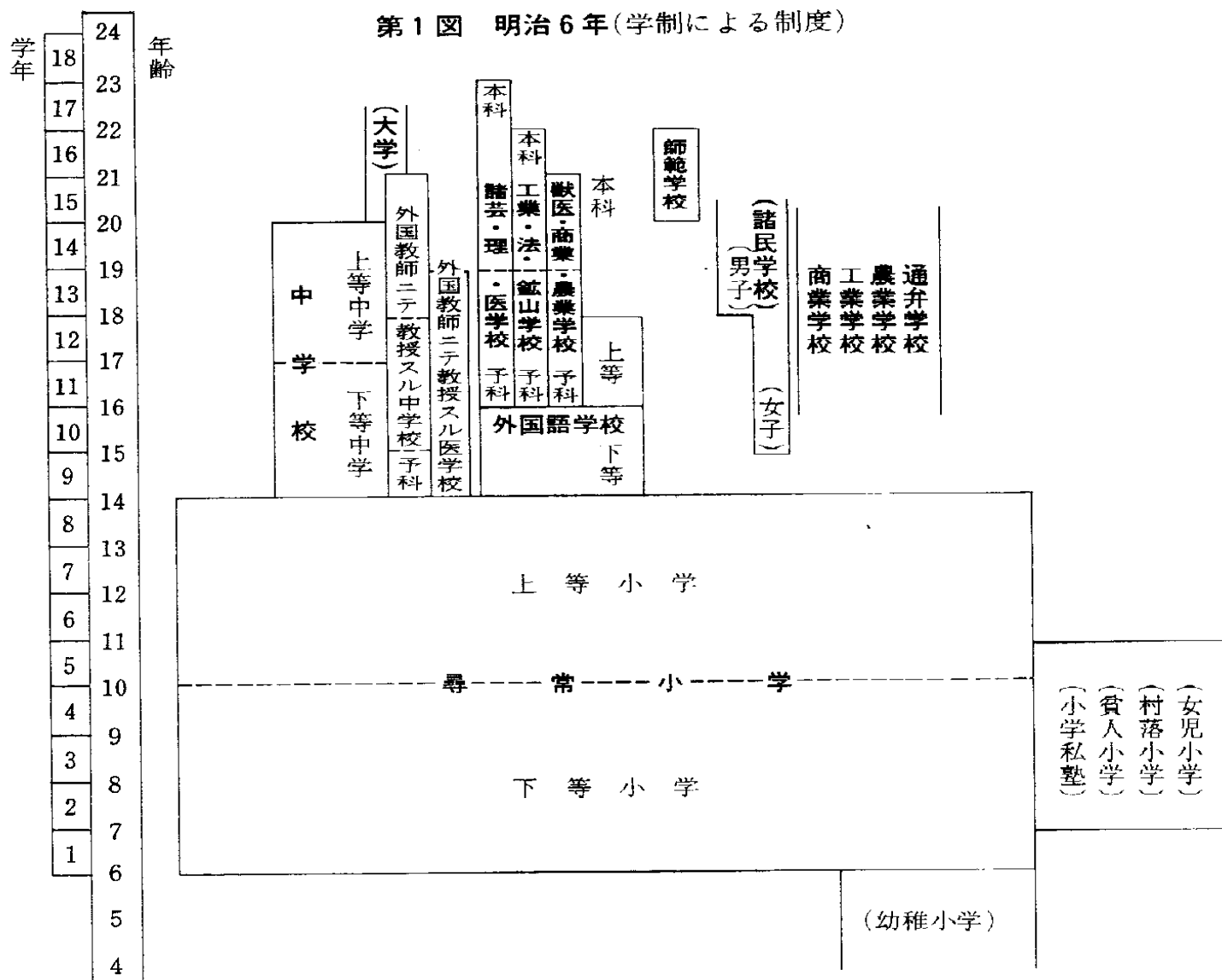
明治6年の学制による複線型の学校制度と、昭和22年4月からの学校教育法による単線型の学校制度をあげてある。さらに本校設立の根拠となる実業補習学校の位置づけを明確にするため、明治33年の学校体系を示した。

昭和10年の青年学校令により本校は実業補習学校から青年学校へ名称変更して敗戦を迎えた。

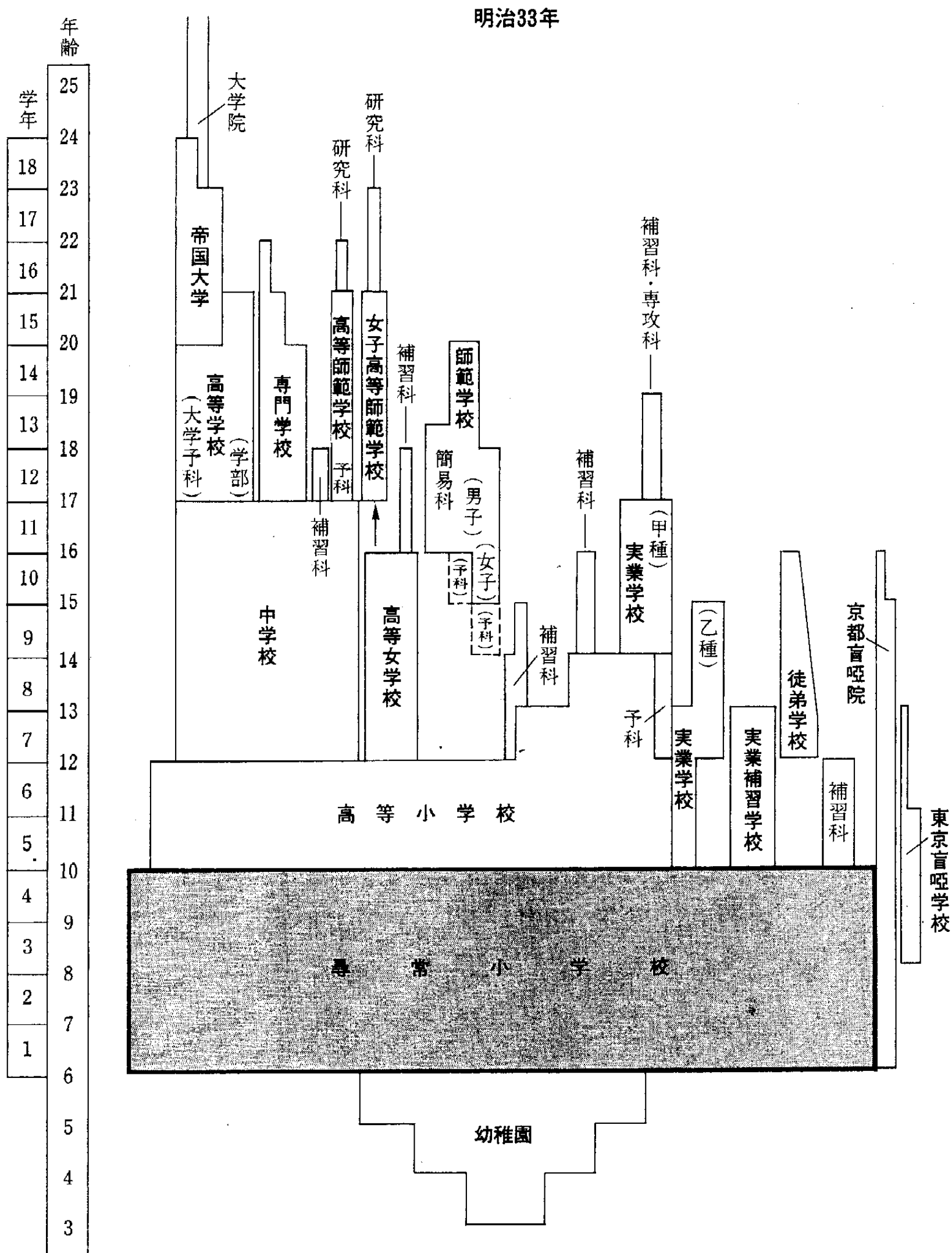
明治6年 近代学制 フランスを手本とした複線型教育

- 1 以下の図は、明治5年学制頒布以後のわが国の学校制度上重要な改革の行われた時期における学校系統を図示したものである。
- 2 年齢は満計算による。
- 3 修業年限・入学資格のはっきりしないもの(各種学校を含む。)は原則として省略した。
- 4 修業年限の限定されていないものは図の上部をあけた。

- 5 研究科・専攻科は原則として記載したが、別科・選科等は省略した。
 - 6 同一の学校の中の予科・本科等の区別は点線によって示した。
 - 7 網かけ部分は義務教育とされているものである。
 - 8 図に示した各学校の幅はその規模(学校数・児童生徒学生数)に比例しない。
- (出典:文部省編「学制百年史」)



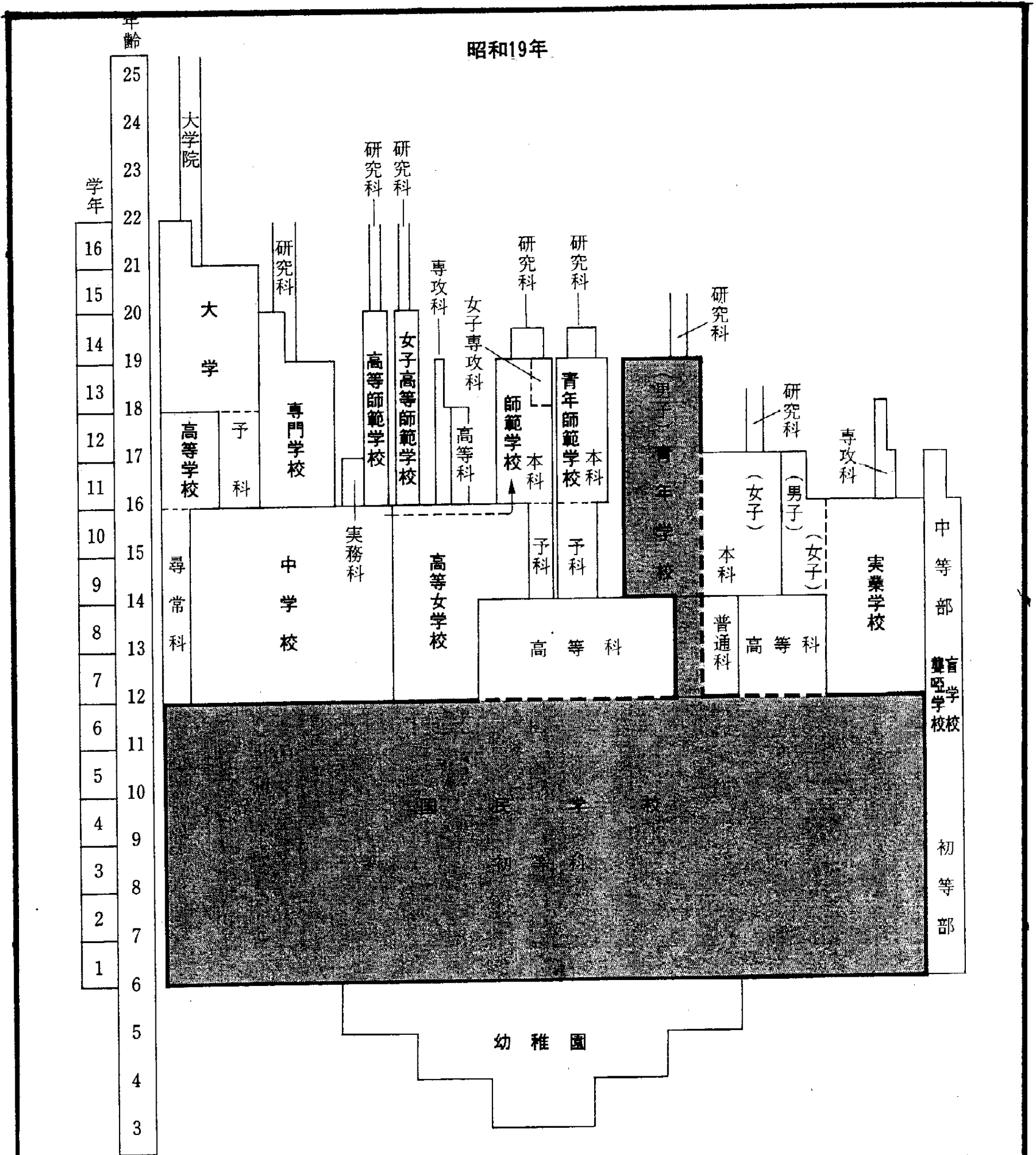
明治6年10月現在——学制を中心とした(実際には未設置のものがあり、また学制によらない旧来の学校があった)。小学校は小学私塾が多く、幼稚小学等は実現をみなかった。諸民学校は修業年限不明である。師範学校は20~25歳の入学であった。「外国教師ニテ教授スル医学校」は中小学卒業で入学と定められていた。大学は設置されなかった。



明治33年9月現在——師範教育令(明治30年), 中学校令・高等女学校令・実業学校令(明治32年)等が公布され, ついで小学校令が改正(明治33年9月施行)されて, 学制のほぼ整備された時期である。

徒弟学校は12歳以上で入学となっている。高等女学校は1年伸縮ができ, 高等学校には専門学部として法・医・工の各学部がある。師範学校の簡易科は男子のみで修業年限は2年4か月である。高等師範学校は師範・中学卒業で入学, 女子高等師範学校は師範女子部・高女4年卒業17~22歳で入学となっている。図示したもののほか実業学校教員養成所(師範・中学・実業学校卒業17歳で入学し, 農業1年, 商業2年, 工業3年)があった。

昭和19年 青年学校 本科 召集

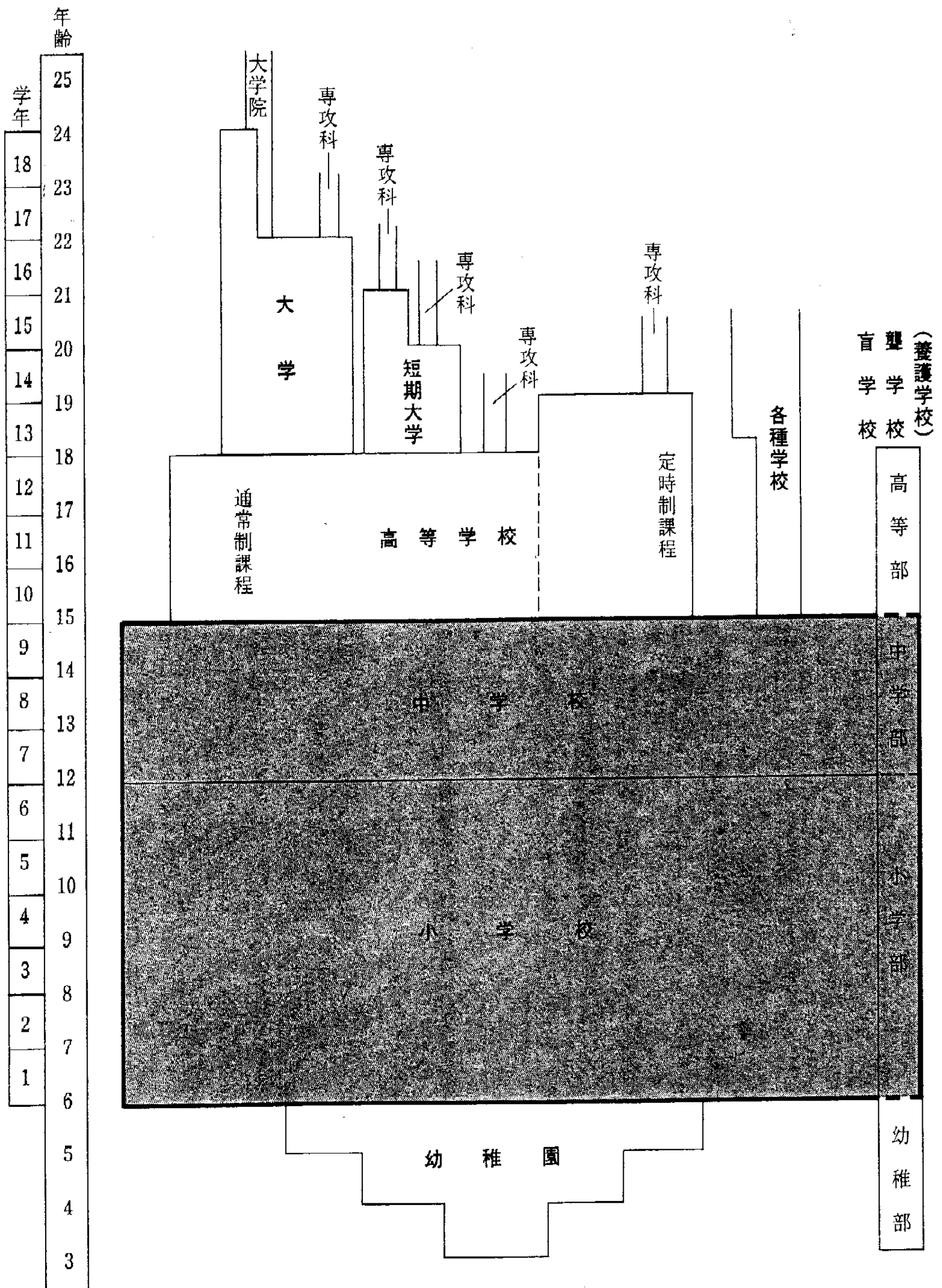


昭和19年4月現在——国民学校令（昭和16年4月施行）を中心とし師範教育令改正（19年4月施行）までを含めて作成した。

国民学校の高等科までの義務制は19年2月の戦時特例により実施されなかったもので、義務制のわくからはずした。青年学校は男子19歳まで義務制（ただし中学校等の在学者または卒業者は免除）で本科は男子は4年、女子は2年に短縮できることになっていた。師範学校・青年師範学校の本科は予科・中学・高女卒業で入学した。大学・専門学校・高等師範学校等は修業年限6か月以内臨時短縮できることになっていた。

昭和24年 単線型教育制度の基礎

昭和24年（学校教育法による制度）



昭和24年5月現在——学校教育法（昭和22年4月公布）を中心とし、23年の盲・聾学校義務制および24年の短期大学発足までを含めて作成した。

盲・聾学校以外の特殊教育の義務制はまだ施行されていない。

みんこの歴史

～同窓生に聞く～

発行日	2004年12月10日
著者	長野県箕輪工業高等学校 図書館・図書委員会
住所	長野県上伊那郡箕輪町 中箕輪 13238
電話	0265-79-2140